UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

No. 65

GAPニューズレター　第65号目次

〈巻頭言〉民族のカルマ…1
UFO問題の真相①ジョージ・アダムスキー…2
〈イラスト〉金星の円盤に乗ったアダムスキー…5
自己の真の半身を知るには　アリス・ウェルズ…6
バミューダ海域の謎　フレッド・ステックリング…6
超能力開発法(1)　亀田一弘…8
カリフォルニア州の円盤…10
幻影と巨石の国へ①久保田八郎…12
ヨーロッパ・エジプト紀行
地方支部の総会、活発化！…34
会員の声…36
〈広告〉昭和54年度・アメリカ中米宇宙考古学の旅…38
〈予告〉昭和54年度・日本GAP総会
日本GAP各地月例研究会案内…40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共禁無断転載。

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて〝コズミック・パワー〟の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真はベルギーGAPリーダー、キース及びメイ・フリットクロフト夫妻
（1978年8月17日、パリにて久保田八郎撮影）

民族のカルマ

今年七月に軍事評論家筋から入手した情報によると、一九八五年までに米ソの衝突により第三次大戦が発生する傾向が濃厚になったという。エネルギー資源や食糧の問題でソ連が窮地におちいり、それが全面核戦争の要因になるらしい。別な軍事評論家によると、早ければ一九八一年までに大戦勃発の可能性もあるという。大衆の知らぬ裏面で恐るべき事態が進展しているというのである。

しかし米ソ首脳部といえども人間の集団だから、核戦争ともなれば当然彼等も身の危険を考慮するはずなので、おいそれとボタンを押すはずはない、と思うのは素人考えなのだそうで、事はさほどに簡単なものではないらしい。

日本はどうなるかというと、米ソのいずれにしても日本人の技術を高く評価しているので、戦後処理に利用するために核攻撃は加えないだろうという。だが日本が核攻撃を受けないにしても世界に動乱が発生すれば、あらゆる原料や食糧の輸入が停止して国内に大混乱が起こることは必至である。

以上はあくまでも推測であって、絶対的な宿命を透視したものではないが、諸般の事情にかんがみて、世界がこのまま進歩して何事もなしに軍縮が行なわれ、核兵器のすべてが廃棄されて天国のような惑星になるとはまず考えられない。人口爆発、環境破壊、エネルギー資源や食糧不足等、宇宙船地球号が危機に瀕していることはだれの眼にも明白である。

スペース・ブラザーズは懸命に大戦の発生を防止しているだろうが、それも限度があるらしい。〝自分のトラブルは自分で始末をつけねばならない〟という宇宙の法則を遵守するならば、地球人が無理解によって起こす難事は、まず地球人自身の手で解決しなければならないのだ。

どうすればよいか？

この解答は各人の内奥にある、と言えば本当でもありウソでもあるだろう。犬や猫のごとき動物ではなくて人間自身が考えねばならぬ問題であると思えば本当であり、世界の大勢に対して少数の先覚者が何を思索しても始まらないと諦めれば本当でもありウソでもあるだろう。

政治形態なるものを分析すると、いつの時代でも絶大な権力を保持して大衆を動員するのは少数の集団であり、決して多数者ではない。要するに権力とは数ではなくて一種のカリスマであり、大衆は催眠術の被験者にすぎない。歴史を振り返ればあらゆる時代に大衆がひと握りの催眠術師に眩惑させられたことがわかる。ここにおいて大衆たる我々の覚醒という問題が起こってくる。しかもそれは個人の眼覚めが要素をなす。したがって結局は各個人の内奥にひそむ解答の発見が最重要である。

戦争は絶対に防止しなければならないが、ただ「イヤだイヤだ」と唱えているだけでは効果はない。平和憲法のみを楯にしても大国は鼻もひっかけないだろう。それよりも日本人が宇宙の法則に眼覚めた世界に冠たる高次な民族に昇華して、その崇高な精神を他国に示し実践しない限り、良き応報は望めぬだろう。

日本人は哲学的感性に乏しくて現実の利益のみを追求する薄っぺらな民族のように白人社会で見られているようだが、これは誤りである。古来、日本人には天性ともいえるテレパシックな感受力が潜在し、豊かな包容力を持つ優しい民族性を保っていた。したがって既成の宗教や哲学を殊更に必要とせず、キリスト教や仏教も生活に定着しなかった。日本人は本来瞑想的であり、心の変化について敏感であった。それは欠点として自意識過剰となるが、一方、自然の美に対して高度な知覚力も有し、これの欠点は人工美の創造力の欠如ともなった。西欧に見られるような美しい家屋や都市の建設は日本人の及ぶ所でない。しかし快適な家屋に住みながら心の抑制ができないよりも住宅環境の如何にかかわらず精神の問題を第一義的なものとしてこれを重視してきた日本人は優秀な民族であった。それは必然、穏和と優雅さを生じる。女性のしとやかさは今なお世界で抜群である。

惜しむらくは戦後に浸透した欧米の唯物思想により、同胞の伝統的な長所が失われつつあり、生活のあらゆる面で白人社会のサル真似が行なわれて、消化不良の薄汚い環境が増大しつつある。ある程度の国際化はやむを得ないにしても、もっと日本独特な国造りを目指すべきであろう。

日本民族は遠い昔太平洋で沈下した栄光あるムー大陸人の後裔である。ムー大陸の別名はレムリアともいった（二種類の大陸が存在したのではない）。ムー人は偉大な指導者〝ラ〟のもとに宇宙の法則を生かし、天国のような平和な社会を建設していた。住民は〝創造主の意識〟を意識し、テレパシックな高度な感性を有していた。この民族の記憶は現代も日本人の中に流れている。だからこそ日本人は外来思想を必要とせず、より宇宙的な根源に対する憧憬が秘められていた。つまり宇宙を統べる絶対的なものに対する志向が潜在していたのである。だがこれは他方で〝権威に弱い〟という弱点となってあらわれた。海外旅行に出る膨大な数の日本人が集団になると不作法かつ横柄な田舎者と化すというのは、要するに個人の弱さから生じるコンプレックスの裏返しにすぎない。

しかし個々の日本人の内奥にひそむ和の精神はまだ失われてはいない。心がそれを忘れているだけである。今こそその宇宙的な記憶を取り返し、四海同胞の精神を生かすならば、民族の良きカルマを作ることになるだろう。つまり奉仕の精神をもって他国を救済するのである。こうして高貴な民族となってこそ大戦の動乱を超えて、みずからが救われるのであろう。他人を救う者が救われるのであって、これは宇宙の法則である。

UFO問題の真相 (1)

ジョージ・アダムスキー

この記事は1965年にアダムスキーがニューヨークで行なった講演テープの日本訳で，本邦初公開のものである。特に1952年10月20日のデザートセンターにおけるコンタクト事件の秘話その他の出来事や宇宙の真相が興味深く語られている。

私は長いあいだ宇宙船について研究してきました。なぜならこの問題は一九四六年に始まって、しかも長く続いてきたからです。この問題は企くの謎を生じたと人は言うかもしれません。しかし現在でもその謎は増大する一方です。

米政府も米空軍もかつて次のように声明したことがあります。

「宇宙船（UFO）は出現しても次の瞬間にはもういない」

しかもジェット戦闘機は空中に何か奇妙な事態が発生するたびに発進して追跡します。そして戦闘機は狙撃しますのでいったいだれが真実を語っているのかわからなくなるときがあります。ですから考えねばならない事が沢山あるのです。

さて先程の米政府の声明やテキストブックなどの件に返りますと、私たちは少なくとも過去十年間にずいぶん進歩してきたことを知っています。第二次大戦が終了して以来、人間は相当な進歩をとげてきました。米国は宇宙開発計画やその他の問題に着手しました。したがって人間は絶えず前進していますし、物事は変化しつつあり、今後も変化し続けるでしょう。多くの不思議な物が出現するでしょうし、人間が注意して見てもそれはやはり不思議な物でしょう。そして常に人間が学んでいるにしても、その不思議な物体がどのようにして動くのか、どこから来るのかと、首をひねって考えるだけでしょう。

他にも文明星はある

私がまず明確にさせたいと思うのは次の事です。

天文学では――私自身一九二五年以来アマチュア天文学徒でしたが――多数の惑星やあらゆる種類の恒星系などについて語られてきました。私たちが地球と呼ぶこのちっぽけな小石にしか人間は存在しないのだと考えるのはバカらしいことです。私たちが神と呼ぶ創造主は宇宙のこうした天体すべての創造者です。どう考えても私たちだけが惑星に住む唯一の人類で、他の惑星群はすべてカラッポだということはありますまい。これは人間が一千戸の家を建てて、そのなかの一戸だけに住み、あとの家すべてをカラッポにして朽ちさせるのと同じです。

イエスでさえも「父は多くの館を作った」と言っています。また「自分はこの世の者ではない」とも述べています。このことは他にも文明星が存在する事実を意味するにちがいないのです。

バイブルには今日私たちがUFOと呼んでいるのとは異なる名称のもとに、過去の宇宙船来訪に関する記事が沢山出ています。しかもそれらの物体は現在出現するのと全く同じように出現しており、現在のそれは大昔に観測された様子と一致しています。

当然、それらは天国から来ると考えられました。なぜなら人間の頭上のすべてはいつも天国と考えられたからです。人々は夜中に現われる星々でさえも人間に栄光をもたらすために出現する天使か何かだとみなしました。

こうした謎の物体についてはずっと語られてきましたし、何かが非常な高空からやって来るとき、それがどのような方法で来るかは別として、そのほとんどは雲の形で現われるのを常としました。今日私たちは多数の宇宙船は光または輝く雲として現われることや、非常に急速に動くことを知っています。流星も輝く光を帯びていますが、時速九万マイルで、四、五百マイルも直線で飛ぶことはありません。

しかし結局天文学ではこのような物が人間の住む惑星、特にこの太陽系内の惑星上にいるとは考えられていません。オーベルト教授は他の太陽系から来るのではないかと推測しましたが、他の太陽系はこの太陽系よりもはるかに離れているはずです。もし宇宙船が他の太陽系から来ているとすれば、地球人よりもうんと進歩していることになります。そして地球人にとっては不可能なのに、宇宙空間を旅することは可能だということになります。しかも彼らは地球人の知性に挑戦したのです。それで米国は一九四八年に宇宙開発を開始しました。現在その計画は前進しています。今、皆さんはソ連がやった離れ業を思い出しているでしょう。

宇宙空間で手袋をぬぐ

かつて人間は時速六十マイルのスピードを超えることはできないといわれました。今日我々は容易に高速道路でそれをやっています。そしてソ連の宇宙飛行士の一人がやったように、人間は宇宙空間をカプセルから出て飛んだと聞かされる

ならば、その話の相手が狂っているとだれしも思うでしょうが、そのことは起こっているのです。

最近の報告によりますと、その宇宙飛行士は恐るべきスピードや寒気から自分を保護するための宇宙服を着ていたあいだ、彼は――人間は真理を求めて諸条件をテストするために何でもやるものなのです――保護用にはめていた手袋を片手からはずしていわばハダカの手を突き出したまま空間にさらしたということです。するとその手はあらゆる皮膚が急速に年をとるかのように、必要以上に強じんな皮膚になります。地上よりもはるかに薄い気圧のために、体内が高圧化し、赤ん坊の手のように柔軟にするのです。しかし何の障害もありませんでした。

これで私たちはバイブルで言っているように「隠されている物事で明るみに出ないものはない」ということがわかります。言い換えれば、創造主が人間に学ばせようとしている物事は、その学びの方向に私たちが成長するにつれて洩らされるのです。そしてそのことは発生しつつあります。

私は世界中を旅行して講演し、各国政府の要人に会いましたが、そのなかにはオランダのユリアナ女王もいます。そして現在何が起こっているかを知る地位にある人々は確実に知っていますが、それについてはみなまじめに考えており、世界のあらゆる場所でそれについて（ＵＦＯ問題について）大衆が知りつつある事を他のソースからもっと知りたがっています。現在、発生している出来事を知らないのは一般の普通人です。その点をお話ししましょう。

地球を破壊するのは人間

人間はあらゆる解答を持っているのではありません。しかも現代はこの世界にとって残酷な時代かもしれません。なぜなら我々は自分自身の手の中に（核の）道具または武器を持っていることをよく知っているからです。

私はだれからも完璧に信用されるほどに正直な人間を知りません。そんな人がいたとしても現代の地球上で生きることは不可能でしょう。地球人の最高の人といえども、ストレスのもとで感情をコントロールできる段階にまで成長してはいません。したがって今人間が所有している（核の）道具は、いかに我々が注意深く眼を注いでいても間違ったときに間違ったボタンを押すこともあるでしょう。そして万物をこっぱみじんに吹き飛ばすでしょう。我々はそのパワーを持っています。だから今こそ我々は自分だけの立場や、何が得られるか、といったことをせんさくすることをやめる時です。なぜなら我々は自分たちの決定による破壊のフチにいるからです。核戦争がその破壊をやるかもしれませんし、レーザー戦争または細菌戦がやるかもしれません。人間が急速に絶滅すると思われる三つの段階があるのです。

私は第一次大戦、第二次大戦に接しました。私は空襲警戒員でした。これは我々にとって切実な問題ですが、別な惑星から人々は、地球人が今日有しているようなコミュニケーション・システムをとっくの昔に発達させましたし、飛行機で輸送する方法について我々が知っているわずかな知識は、とっくの昔に持ったでしょう。たぶんこの人々（宇宙から来る人々）は当時天使と呼ばれたことでしょう。

今日彼らは別な世界の人間として、おそらく地球を攻撃するかもしれない敵とみなされています。また私はマッカーサー将軍が彼らに（ＵＦＯに）よく遭遇したことを知っています。彼はそれで何度も国家と世界に次のように警告したのです。

「我々は国家間の不和を解消して、世界中の防衛網を確立しなければならない。なぜなら大気圏外からの攻撃の可能性もあるからだ」

真理はあくまでも真理

さて〝宇宙〟とは、我々が宇宙の中にいることを意味しません。我々は宇宙について〝語っている〟にすぎません。また我々は自分が宇宙の中にいることをめったに意識しません。人間は宇宙開発事業の中にいるのではなく、宇宙そのものの中にいるのです。

この地球は時速一千百マイル以上で動いており、我々もその地球上にすわって一緒に宇宙内を動いています。我々の上も下も、四方八方が宇宙であり、いわば巨大な気球の表面にすわっているのと同じです。我々はそれについて何もわかりません。その〝表面〟で生きているからです。しかし我々が宇宙空間のどこかにいてそれを見ているならば、いかに速く動いているかがわかるでしょう。

したがって巨額の費用をつぎ込んで別な惑星へ行ったならば、その惑星の住民たちは「地球から宇宙人がやって来た」と言うでしょう。ちょうど今地球人が言っているのと同じことです。ですから我々もたしかに宇宙に住んでいるのであり、生活や生存を宇宙に頼っているのです。魚が水中にいなければ生きられないのと同様で、生存のために海、川、湖などに頼るのと同じです。

我々はこれ以上自分を愚劣にしてはなりません。謎はあくまでも謎であって、問題を解決するものではありません。しかし真理はあくまでも真理であり、それはあらゆる謎や混乱や矛盾にかかわらず現われてきます。

今月十日の問題に返りましょう。これはハンテントリーとブリンクリーの報告です。天文学を勉強したり学校で学んだりした人は、月には空気がなく、それは死んだ天体だと教えられて来ました。しかし大抵の場合、死んだ物は存在しないのであり、崩壊して無になります。生きている物だけが存在するのです。だから、いかなる物にせよ、形が何であれ、どこに存在しようが、およそ存在する間は生きているのであって、生命が脈打っています。

これはだれの話だったか思い出せませんが、すばらしい解説です。夜、ホテルでテレビで聞いたのです。しかし話の内

容は覚えています。それによりますと、毎日、月面から十トンもの砂じんが飛び散っており、そのうち五トンが地球に降りそそいでいるというのです。したがって地球は毎日肥えているわけです。私の話がおわかりでしょうね。

十トンもの砂じんが毎日月面から飛び散るというのに、一方、原子力委員会の説によりますと、この太陽系は四十億ないし六十億年前に創造されたということですが、その間に月が存在したとすればなんという巨大な物体だったことか！しかも月は空気のない天体だという。そしてぼう大な砂じんを放出しているのです。

人間は月だろうが惑星だろうが、自分がそこへ到着して足跡をしるすまでは、自分のやっているすべての物事を理論づけます。現在の眼視観測器でさえも真実を伝えるほどに充分なものではありませんが、常に改良はされています。金星へ打ち上げられたマリナー二号を例にあげてみましょう。これは金星上空二万二千六百マイルの位置で停止しました。それから七千フィートの冷たい雲が存在していました。しかしカプセルは熱くなりました。華氏八百度を記録したらしい。これでは金星では人間の血液は沸騰することになります。しかし米政府は金星探査計画を放棄しません。人間の血液が沸騰するというのに人間を送り込んで何の役に立つでしょう。何にもならないではありませんか。したがって、大衆には不可解な事が裏面で進行しているのです。

ホプキンズ大学は大気球に望遠鏡を取り付けて地上八万五千フィートの上空に打ち上げましたが、金星大気圏上層部に氷結物を発見したと言っています。これで地表が華氏八百度とどうして言えるでしょう。企く矛盾した話です。科学者は首をひねっていますが、これは彼らがまだ金星へ行ったことがないからです。

まだほかにもいろいろあります。私は六インチ反射望遠鏡で撮影した月面のすばらしい写真を持っています。最近の月ロケットで撮影された写真よりももっとすぐれたものです。もっと鮮明です。月ロケットで七千五百枚も撮られたのに、当局はたったの六枚しか発表しません。その写真類は不鮮明だったというのです。ピントが合っていたはずなのに一体どうしたわけでしょう。

一八〇〇年代に返りましょう。月面で不思議な現象が見られたという記録が多数あります。一九五四年四月のブルーブックという雑誌を見ますと、ニューヨークのマラードという科学記者の書いた記事がありますが、彼はこの問題で研究しました。そして次のように言っています。

「私がこの問題について書いているときに、月には建築ブームが発生している」（笑）。このことを考えてみますと、パサデナのカリフォルニア工科大学が、マラードが設計したプラントを計画している意味がわかります。

科学者は結局月へ行ってそこに本部を建設し、観測所を建てて地球を観測するでしょう。彼らが月に関して何も知らないとしても、月には何もない、人間はそこに住むことはできないなどと言っています。そうすると莫大な金と時間をかけながら、科学者は何をしようというのでしょう。

オープンマインドの人もいる

今日、人間は二枚舌になっています。人間はもはや真実を語りません。それは真実を知らないからです。だから疑うのです。バイブルにも二枚舌を使う人のことが出てきますが、それは今もいるのです。

私自身の体験をお話ししましょう。そうすればもう少し理解されるでしょう。

私は来月で七十四歳になります。私はニューヨークのセント・ジョセフ教会へ行きました。古い建物でしたが、今新しく建て直されたのではないかと思います。私はその教会で勉強したことがありますが、いつも謎の背後にあるものを知ろうという欲求をいだいていました。また軍務に服したこともあります。しかし今度私がそこへ行ったとき、そこには僧や尼僧がいて、彼らは尼僧たちに話してやってくれというので、講演を行ないましたら、一般人よりもよく理解したようでした。しかし最後に一人の僧が私を打ち負かそうとして、私にどなりつけました。そこで司祭が彼の部屋へ私たちをつれて行きました。数名の人がいます。私だけではありません。司祭が言いました。

「私はあなたの書物をすべて読みましたが、あなたがワリーの兄弟だとは知りませんでした。彼は教会の幹部です。父からつかわされるものが、なぜそんなに不思議なことなのですか。父は第五の天国へつれて行かれて、またつれもどされました。第五の天国とは惑星であるにちがいありません」

オープンマインドを持つ人は多くいます。

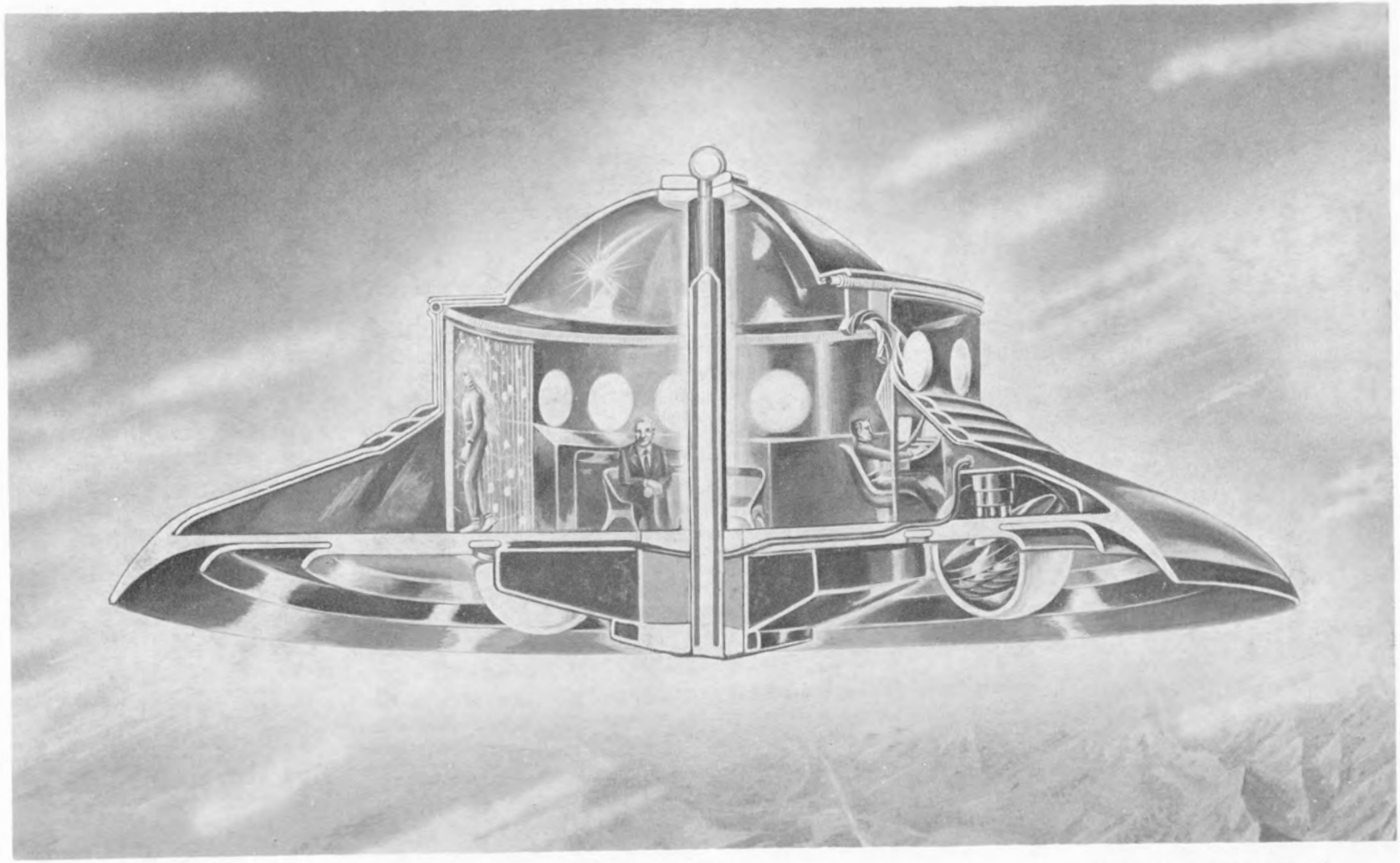
五九年にローマへ行ったとき、多くの人に講演しましたが、そこには司祭、政府関係者たちがいて、円盤問題をよく知っていました。しかし彼らが最も気にしていたのは、イタリアの大衆はその問題（UFO問題）について受け入れる用意ができていないということでした。

私はいつも言います。米政府すらも二十五年前にオーソン・ウェルズが火星人襲来のドラマを流したときのパニックに言及しますし、そして米国の大衆は真実を受け入れる準備ができておらず、心を常に疑惑の状態に保っているのだと言います。しかし一方ではいわゆる空飛ぶ円盤を愛好して、ワシントンへ多数の手紙を送ったりします。

私はちょうどワシントンから来たところで、そこに三週間滞在しました。政府関係者に円盤映画を見せましたが、これはカラーで撮られたもので、ワシントンがこのことを知る前にテレビで放送しています。空軍は空中に何も存在しないと言明し、その多くは正体不明だと言っていました。そこで私は映画を見せましたら、彼らは何も言えませんでした。画面にはっきりと何かが写っているのです。

（以下次号）

久保田八郎訳



金星の円盤に乗ったアダムスキー　（会員・池田雅行氏（大阪）画）

自己の真の半身を知るには

アダムスキー財団理事長
アリス・ウェルズ

あなたはご自分の真の実体である〝宇宙的な半身〟を知っていますか。

あなたはそれを〝魂〟とか何とか呼ぶでしょうが、実際にはそれは個々の実体としてのあなたが長い時代を通じて持ってきた体験の綜合体なのです。

「どうしてそれがやれるのか」とあなたは言うかもしれません。答は全く簡単です。創造された各綜合体がそれ自体の波動を持つのです。例をあげましょう。

一粒の砂は常に一粒の砂です。それは他の物質と混ざったり、または引き潮や海水などで一カ所から別な場所へ運ばれるかもしれませんが、正体を失うことはありません。あらゆる創造物もこれと同様です。

個人は自己の周囲の世界で見い出せない物を求めて生涯を費しますが、ほとんど知ることはできません。しかし自分が求めるものは〝自分自身の内部〟にあるのです。

この〝自己知〟のカギは種々の方法で見い出せます。私に対してはジョージ・アダムスキーが理解と知恵のカギを与えてくれました。初めて彼が話すのを聞いたとき、この事実を悟り、彼の門下生になってから少しずつ私の記憶チャンネルが開いてきました。アダムスキー財団にいる私たちは、永遠の真理を探求する人のすべてに対し、彼の知恵の言葉をおわかちする特権を謙虚に感謝しています。

× × ×

コズミック・ブレティンの一九六五年三月号がジョージ・アダムスキーによって発行された最後の号になりました。当時彼は東部の講演旅行のために二月に出発しましたが、三月号のブレティンは編集されて、出発前には印刷の準備ができていました。次にそのときの抜粋を掲げます。

「私たちの労力の実が収穫され始めているので皆様も喜んでおられると思います。近い将来、世界の人類は無知から解放され、生命の目的を理解するでしょう。

一九六四年の一月に「生命の科学」コースを学習し始めた人たちは十二課を終了し、ブラザーズも私もその結果に満足しています（注＝「生命の科学」は一課ごとに分冊として配布された）。この知識を学んで応用した人の大多数は、自分の能力の著しい拡張を得ています。たしかに多数の研究者は奇跡と呼んでもよい物事を達成しました。このことは学習した人にとって「生命の科学」が今後偉大な価値をもつことを示しています。

学習と宇宙の原理の応用には終わりがありません。宇宙の原理の古い概念を明確にし、日常生活で生かせるようにしてくれたブラザーズに感謝します。この講座は私たちの精神生活ばかりでなく、あらゆる行動にも応用できます。この学習だけでも良き未来をつくるのに役立つでしょう。

すでに何度も述べましたように私たちにかかわりがあるのは宇宙船（ＵＦＯ）の目撃ではありません。一つの目撃は他の目撃と異なるものではなく、それよりもブラザーズがもたらした知識が私たちの生活の改善に役立つのです。この知識がなければ、良き社会は望めません。私たちが真剣であるならば、当然ブラザーズの知識を個々に生かすべきです。政府は私たちにかわってこれをやってはくれませんし、宇宙から来る訪問者に関する情報がやってくれるわけでもありません。知識というものは役立たせなければ価値はないのです」

バミューダ海域の謎

アダムスキー財団理事
フレッド・ステックリング

多年にわたってバミューダ三角地帯といわれるものに多くの疑問が投げかけられてきました。この他にも多くの謎の地域があります。

この記事ではこれらの〝特殊地域〟に関して発生する多くの現象を解説したいと思います。

まず、フロリダ半島、バハマ諸島、バミューダ諸島を結ぶバミューダ三角地帯では、たしかに飛行機や船が消滅する事実があることを指摘しましょう。艦船の消滅の記録は数百年間にさかのぼります。一九四五年に発生した海軍パトロール機の一個編隊の失踪の謎は、世界の名高いニュースになりました。その後も年を経るにしたがって多数の飛行機が消滅しています。しかしこれらの〝謎〟のすべては自然の因果の法則で説明できます。磁気の影響のみがこの蒸発事件の原因なのです。

この問題を多年私は調査しましたが、それにより次のような知識が与えられました。

地球上でこうした謎が発生するのは一カ所だけではなく、企部で十二カ所あるのです。バミューダ三角地帯は最も広く知られた場所ですが、他にも十一カ所あります。

(1)アフリカ南部　(2)南太平洋のイースター島地域　(3)ブラジルの沿岸沖合　(4)ニュージーランドの北部　(5)オーストラリアの西部　(6)南極　(7)北極　(8)日本の南東部　(9)ハワイ地域　(10)インド北西部のヒマラヤ山脈地帯　(11)北アフリカのモロッコの山岳地帯。

この問題については多くの記事が書かれてきましたが、ほとんどは心霊的なもので、真相を説明するどころか大きな謎を生じさせています。

竜巻による海水の噴出、潮流の渦巻効果、海底地震、海底火山の爆発、大津波等の自然の原因が考えられますが、いずれにしても船または飛行機の残骸が発見されるはずです。

別な話によりますと、こうした消滅の原因としていわゆる時間と空間のひずみやUFOをあげる人もいます。船や人間が別次元の中へ入って消滅したというのです。あらゆる物理的な生命は三次元に属するので、これはもちろんナンセンスです。四次元は物質が自由な状態にあるもので、結局、我々が冬に雪だるまを作って、雪が解けて水が蒸発したあとも、なお雪だるまが存在すると考えるのに似ています。生命はそんなに神秘的なものではありません。自然の法則はいとも簡単なもので、容易に理解できます。物質は原因から結果の状態に移行し、また逆もどりします。そのエッセンスはあらゆる生命体の創造に何度も応用されます。

別な説によりますと、海底に今なお生きていると思われるアトランティス文明の存在が謎の根源だということです。

いうまでもなく、地殻の下に文明が存在することは不可能です。これは我々が地下の内部に深く入るにつれて温度と圧力が急激に増大するからです。今までに人間は地下約六マイルの深さにまで堀り込みました。そして地表のそれよりも百倍もの温度と圧力を発見しています。地殻下五十マイルでは七千度の温度に達するのです。

また二万五千年前に自然の変動によってアトランティス大陸が沈下し、住民がエネルギーとして使ったレーザーが今なお海底で生きているのだと称する人もあります。このレーザーがバミューダに関連する謎の原因だというわけです。

アトランティスが存在したことにまず疑いはありませんが、大陸が沈下したときにその発生エネルギーも消滅したと思われるのに、レーザーが今も作動しているでしょうか。言い換えれば、エネルギーの刺激された放射による光の増幅を意味するレーザーには、電磁放射を生じさせるのに永続的なパワーの供給を必要とします。

二万五千年後にレーザーがなおも作動しているというのは、あまりに飛躍しています。

もしレーザーのせいだとすれば、レーザービームのあるこれら一定地域を横断するのは常に危険だということになりますが、多数のパイロットはバミューダ海域を何度も安全に飛んでいるです。

パイロットであり、世界の航図を持つ私は（注＝ステックリング氏は自家用機操縦免許を持つ）、その航図を研究して、五度またはそれ以上の磁気障害が警告されている多くの地域を発見しました。大陸や諸島もあれば、海洋もあります。

この障害を理解するには、地球の磁場の発生に関する諸原理をまず理解する必要があります。

地殻下の溶けた外層部（マントル上層部のことか？）は磁場の発生源です。これは地球の自転と同じ方向に回転しながら地殻下で作動する一種の巨大な発電機として機能を発揮しています。しかし回転速度は自転の半分にすぎません。そのために発生する摩擦が磁気を生じます。自転軸を中心にして回る地球の二十四時間の速度は、赤道上で音速の三倍、すなわち時速一千二百マイルです。これによりある地域では溶解した物質の渦巻が起こります。この渦巻効果が磁気のボルテックスを引き起こし、これが飛行機のコンパスの針を狂わせる原因になるのです。

バミューダ三角地帯では、他の十一カ所と同様に異常な磁気ボルテックスが存在します。こうした地域は他の場所に比べて大ボルテックス発生地域と呼ばれます。これは小さな竜巻に比較される大ハリケーンにたとえてよいでしょう。

地球内部から発生するこの磁気ボルテックスは、船や飛行機の消滅の直接の原因ではなく、これに関連して第二の力が働いているはずです。この力は地球大気圏内外の磁気ボルテックスともいうべきもので、これは一平方インチにつき一千以上もの力線で地球を取り巻いています。

磁場の外層部もボルテックスを生じますが、これは地球ではなく太陽によって生じます。太陽面の異常な大爆発は太陽風を起こしますが、これが地球に到達すると大きな電波障害や異常気象を生じます。

ただしこの力だけでは飛行機や船を破壊できません。電離層やバンアレン帯などで弱められるからです。

しかし、もしこの二種類のボルテックスが互いに結合して、一つは地下から、一つは上空から働くならば、いわゆるニュートラル地域がこの二種類の磁気エネルギーの眼の中に生じ、ここでは物体の分子が非磁化され分離します。

あらゆる物質は分子から成り、これは互いに陰と陽とでつり合っています（訳注＝正確にいえば、分子を構成するものは陽電気を帯びた原子核と、陰電気を帯びた電子とである）。この陰と陽は開いたり閉じたりできるジッパー（俗にいうチャック）のようなものです。

磁気ボルテックスの眼の中では、あらゆる帯磁物体はニュートラルとなり、このために物体は分離します。つまり物体は原因としての原子の結合状態から元にもどるわけです。

問題はこのような地域を避ける方法とボルテックスを予知する方法です。海中から出るエネルギーは一定位置にあるために正確に指摘することができますが、上空から来るエネルギーを予測することは容易ではありません。太陽の周囲の軌道を回り、磁場の上層部をフルーツゼリーのように前後にゆり動かします。南北の二極も決して安定したものではありません。下部の流体は中心部に集中するものの、地球の振動により磁場は極地で七十マイルの円内を前後に移動します。

太陽の活動も地球を取り巻く磁場の乱れの原因となるエネルギーを生じ、これ

（33頁へつづく）

超能力開発法

(1)

亀田一弘

筆者亀田先生は大透視能力者であり、五十年以上にわたって数十万件の透視を行なわれた世界的な超能力者である。博学多識、古今東西の思想問題に通じ、透視力開発に多数の学者識者を門弟として指導にあたられた。日本GAPに特別な親近感をもたれる先生が今回自発的に本誌に寄稿されたことは感謝にたえない次第である。（本文は原文のまま掲載）

起死回生に想う

私は久保田先生の御紹介に拠って、多勢の日本GAP会員の方々に面接し、または書面を頂くのであるが、何れの皆さんもスベテ善良な方達であることは、他の宗教や、研究の集りの人達と大差を感じて、私は親しみを感じているものであって、衷心から会員諸氏の御健康と御幸福とを祈るものである。

今年一月末頃に、私は、腸閉塞で、入院手術をしたが、何分にも主治医の先生や、看護婦さん達から見ると、八十二歳と云う年齢だけ考えると、大手術は無理である如くに想われたらしいのであるが、私は、兎に角手術をするより以外に方法が無いのであるから、生死を超越して一切を主治医と看護の人に任せて居った。

幸いに経過がよろしく手術後一週間位で生命は大丈夫と云う事になったが、斯くなる上は今後生き延びる心づもりを決めなければならない。そこで考えた事は、私は肛門に行く道が塞がったから口から喰べものや水が通らなくなった故に、死に瀕したのである。

人体は複雑精妙なようであっても、つまる処は、口から肛門に通じ、栄養を摂り排泄することに拠って生きるものであるとすれば、これ、他の地球上の生きものと同じであり、木の葉を喰べる青虫とも同様であると考えた。そこで、私は、これから生きるためには、此の地球上の自然界に棲息する、スベテの動植物の如くに、自然界の環境に忠実に、そして、一生けん命に、気を入れて、懸命に生きようと考えたのである。

それが効を奏じて、回復が頗る早かったが、少し落ちついて考えて見ると、私は、此の地球上の自然界の生きものとして、真剣に生きるが、どう考えて見ても、此の地球上の自然界には、我々人間程に、新らしい大脳皮質が発達した生きものは、他には居ないのであることに気がついたのである。

そこで私は、また考えたのであるが、恰かも都合よく、同人徳永耕二医博から贈られた、カール・セーガン著、長野敬訳の、エデンの恐竜、秀潤者版で、知能の源流をたずねてと云う書物を読むことによって、私の意志は確然と、私の生きるべき道を決定したのである。

私は、その本を、先月初旬に老人性白内症の手術のために、信濃町の慶応病院の眼科に入院中に充分に味読した。そして、この地球上の他の生きものと、人間との大脳の差を充分に識ったのである。その上、人間に於ては、祖先達から遺伝された処の遺伝子による情報のみならず、出生後に学習によって大脳皮質の神経細胞のニューロンに植えつけられる情報の方が、生きるために特に必要であり、また、それは我々の文化の進み、科学が開発するに従って、益々多くなるものであって、人が成長した後であっても、尚、学習することによって、智識を獲得したものを用いて、何かの案件について、それに拠って、一つの考案をまとめ上げて、大脳に記憶させるときには、極めて小さい大脳神経のニューロンが、新らしく造られるが、それを微小回路というと云う処は、私の神経に突きさったので、私は、早速その微小回路を大脳神経のニューロンに造り上げるべく努力をしたのである。

幸に、私は、日常、いろいろの方面の方達が、いろいろの案件を持って、御相談に来訪される立場にあるから、先づ、新らしい科学的の出版物の中から、信用してよろしい書籍を読んで、言葉を符牒として智識を用意して置いて、それを、いろいろの案件に応用して、有効適切な手段方法や処置法を考えてまとめるのである。

それを、その人達に話すについては、私の透視や、幻視や、人相法が役に立って、一般の人より数歩の先きが見えるのが、大いに有利である。私は斯くして、約二ケ月の間に、三十位の微小回路を、私の大脳皮質の神経細胞のニューロンに造り上げることができたのである。実験は成功したから、今後は、私は自からの努力勉強によって、私の大脳皮質の神経細胞を、より発達させ、より活躍させるべく心がけているのである。

世の中には私の事を超能力者と云う人が多いが、私は人間として、能うる限りの大脳の神経の発達を訓練しているものであって、人間である以上の成果は期待していない。

しかし、それこそは、来るべき世代に、我々日本人が生きるための、重要な仕事をするための条件であると考えているものである。私は、私が今後与えられた余生を、生きるための覚悟をしたことを、我が愛する年若い日本の方達に伝えて、私を乗り越えて、大いに世代に活躍されることを期待するものである。

（昭和五十三年七月十七日）

10％以内に入る人になれ

昔から洋の東西を問わず、人間の集団の中では、その5％の人がヤル気があって然かも優れた智能を持っていると聞いている。

それ等の人達は、祖先から譲り受けた遺伝によって、その大脳の働らきが衆に勝れているものであるが、幸な事には、我々人間は、他の自然界の生物の如くに、出生後に短時日で独立して生きる程

に成熟して生れ出て来るものでは無い事である。

昆虫は卵から孵化して直ちに自立して活きる道を心得ている。魚も亦然りである。爬虫類も同じではあるが、鳥類となると、巣立ちまでの短かい期間であるが、親に哺育され、そして、飛翔することを学ぶのである。哺乳類になると、馬のように、生れて数時間で親の群れと共に馳けることができるものもあるが、それでも、或る期間中は親に護られて、いろいろと生きる道を学習するものである。

処が人間になると、その大脳の発達が素晴しいが故に、他の此の地球上の自然界の動物の如くに、大部分の行動を祖先達から遺伝されてその脳細胞に持って生れて来た処の、体内情報に頼って生きるにしては、その生活の様式が頗る複雑である。

その故に、他の自然界の生物の如くに、短期間に独立して生きることができない。つまり、未成熟の状態で生れ出て来るのである。その故に、幼時から青年期の初期に到るまでの学習によって、祖先達から遺伝された処の体内情報を根本に置いて、学習に拠る処の体外情報によって、生きる努力が必要となって来るのである。

往時には未だ科学的の発見も技術も、甚だ心細い状態であったが故に、人間と雖も、その遺伝されて持っている大脳の神経網の働らきに拠るところの才能が必須の条件になって来るのであって、その結果が、或る集団の中には概ね5%の叡智に優れた人が存在すると云う事になるのである。

然し、私は、先きに幸なことにはと書いたが、此の自然界の生物は複雑な発達をしたもの程その大脳の神経網のニューロンも、また複雑な回路を造るものであって、しかも、それが生後にも学習によって、新らしく造られるものであることを、私は、此の半年間で、或る程度の実蹟を得たのである。私が八十二歳である事を考えて下さい。

未熟な状態で生れ出て、然かも、日に月に進歩向上する処の人間社会の文化に対応するためには、も早や、生れつきの5%の才能のみでは役に立たないまでの状態になっているのである。そこで、我々の学習に拠る智能の開発によっての大脳の神経網のニューロンを造り上げることに拠っての体外情報を豊富に蓄えたものの出る幕があることになる。

私が、最も正直な純粋な人達の集団であると見ているGAP会員の皆さん、どうか、今からでも遅くありません。現代の尖端を行く科学の智識に拠って、その体外情報を蓄積して、人間の集団の中での10%以内の人になって頂きたいのである。

（九月二日）

テレパシーの応用

私は今から五十三年以前、遇然的に透視の能力を得たが、それを足がかりにして、いろいろと世に称えられる処の、超能力と云うものを勉強して見たのである。

しかし、人間の大脳の神経細胞の組み合せは、多分に祖先からの遺伝に拠るものであることによって、甲の人には容易にできるが乙の人には難かしいこともあり。或る人は先天的に、それに向いて居って、亦或る人は別の才能を発しると云うことがある。

私は、透視や幻視または霊感や霊聴等がスベテ術者の右の脳半球に於て感得されることを識った。しかし、私の立場としては、日常来訪者に面接して、それぞれの方が持って来る、いろいろの問題に対する判断と解決策とを与えなければならない。

大脳の右半球に於ては、印象的、感覚的のことを主として司り、左半球の方では、分析的、攻究的に事物を判断するとすれば、当然私は大脳の右半球の働らきを誘発して透視の能力を発揮したが、お客に対しての解答には、左半球をはたらかせて、事物の成り行きを分析解釈をして、その対策を樹てなければならないことになる。そこで、私はいろいろと勉強を始めたのであるが、特にこの十年位の間は、アラユル方面の優れた科学書に飛びついて読み漁ったのである。

その間も、日常の仕事の面では、やはり透視と幻視とを用いているから、右の半面も休ませてはいない。

人さまざまで、私には透視と幻視、それからテレパシーの受信とが向いているらしい。今から十年以前に、テレパシーを発信して、特定の相手に感じさせる研究をしたこともあるが、私は、屢々胃痙攣に悩む結果になった。

今年一月に私は入院手術をした機会にいろいろと考えて見ると、いよいよ生涯の仕上げをするべき時期に来ているらしいと、私は再び己れの大脳の右半球を働らかせるべく努力を始めたのである。

ソビエット連邦に於ては、この十ケ年位以前から、思念の投射や、テレパシーの研究に科学的な方面からの開発に、一と方ならぬ力の入れ方である。

有名な科学者もさりながら、超能力者の側にも、ウルフ・グレゴレヴィッチ・メシングを始めとして、女性ではネリヤ・ミハイロヴァ、テレパシーではカール・ニコライエフ、とユリ・カメンスキー等の素晴しい人達や、その後継である大学生達が現われている。私は、此のテレパシーを、我々の日常生活の中に持ち込んだら、ドンナ事になるかを、現在研究をしているが、ココで我が愛するGAPの会員諸君に、一つのヒントを与えることにする。

先づテレパシーの能力は人間一般が持っている事を信じるのである。観念の集中も、精神の統一にも努力をする必要がない。ただ、己れがリラックスをして、精神的に安定した静かな状態になる訓練をする事。ソレから、先づ受信の方から入るべきであって、コレは、相手方が何を考えているかと、ジッと構えて見る訓練をすべきである。発信の方は、公園なり駅の待合室なりで、無心の相手に、コウ動作をせよと思念を固めて、送るのである。

（九月十九日）

カリフォルニア州の円盤

昨年８月「中米宇宙考古学遺跡の旅」（ユニバース出版社主催）を実施して大成功を収めたことは本誌62号の「太陽と神々の国を訪ねて」で詳細に報告したが，13日の午後ビスタの米ＧＡＰ本部を訪問後，全員バスでロサンゼルスへ引き返す途中，６時半頃数名のＧＡＰ会員が空中に浮かぶ奇妙な白いリング状物体を目撃して（他の人達は疲れて眠っていた）そのなかの佐藤和枝さんが最前席にいた編者の所へ知らせに来た。編者もすでに気づいていて数カットの写真を撮影したが，結局不明のために公開しなかった。

しかし約１年後の今年８月６日，静岡支部総会へ出席した折，旅行に参加したＧＡＰ会員の大久保千秋君が意外な事実を洩らした。以下は同君の報告である。

「ビスタのＧＡＰ本部に着いてから僕は生前アダムスキー氏が使用していた事務室の中で色々な物を見ていました。そしたら無性に涙が流れ出て頬を濡らして下へ落ちるんです（この事はア氏の高貴な波動に影響されたためだと思っております)。その近くには２名の女性（ＧＡＰ会員ではありませんが）おりまして，「泣いているわよ」とかなんとか言って横眼でチラチラこちらを見るので，たまらなくなり，溢れ出る涙を隠そうとして一生懸命ぬぐってもダメなのです。ぬぐってもぬぐって涙が止まらないのです。質疑応答が終わるちょっと前まで何かキュッと胸をしめつけられるような感じがずっと続いていました。それから個々に本部を出てバスに乗りました。

そしたらまた胸をキュッとしめつけられるような感じに襲われ，またしても涙が溢れ出てくるのです。そんな理由で疲れはいつしかきれいさっぱり消え失せてしまって心の中はすっきりしたんです。あとで聞いてみたところ，多くの人は疲れていたらしく，バスの中に乗ってからすぐに居眠りをしたらしいんです。僕はこんな事がありましたので，バスに乗ってからは一睡もしていません。

涙が止まってから右側の風景をずっと見ていまして，そうしてから左側に眼を移したところ，そこにオレンジ色の（正確には言い表わせません）円盤が，生きている実体が（僕にはそう見えました）超低空で飛んでいるのを目撃したんです！　僕は唖然として，我を忘れてその円盤を見続けていました。

それから我に返って『あ，逃げられちゃう』という想念が起こり，『写さなければ！』と思ってカメラを持ち上げたところ，フィルムが入っていませんでした。急いでいましたので，４回ぐらいまでうまく歯車にかみ合ってくれません！　５回目にようやくはまってくれて『いざ世紀の瞬間！』とカメラを向けると，もうそこにはいませんでした。がっかりして前方を見たところ，銀色に変化した円盤が上空にあがって行く光景を見まして，その時には一応写真に写しましたが，帰ってから現像してみたところ，ボケて光だけがネガフィルム一杯に写っていました。友達のニコンカメラを借りて持ってきていました。正直に言うとカメラを操作するのはこれが始めてでした。カメラに関しては無知です。

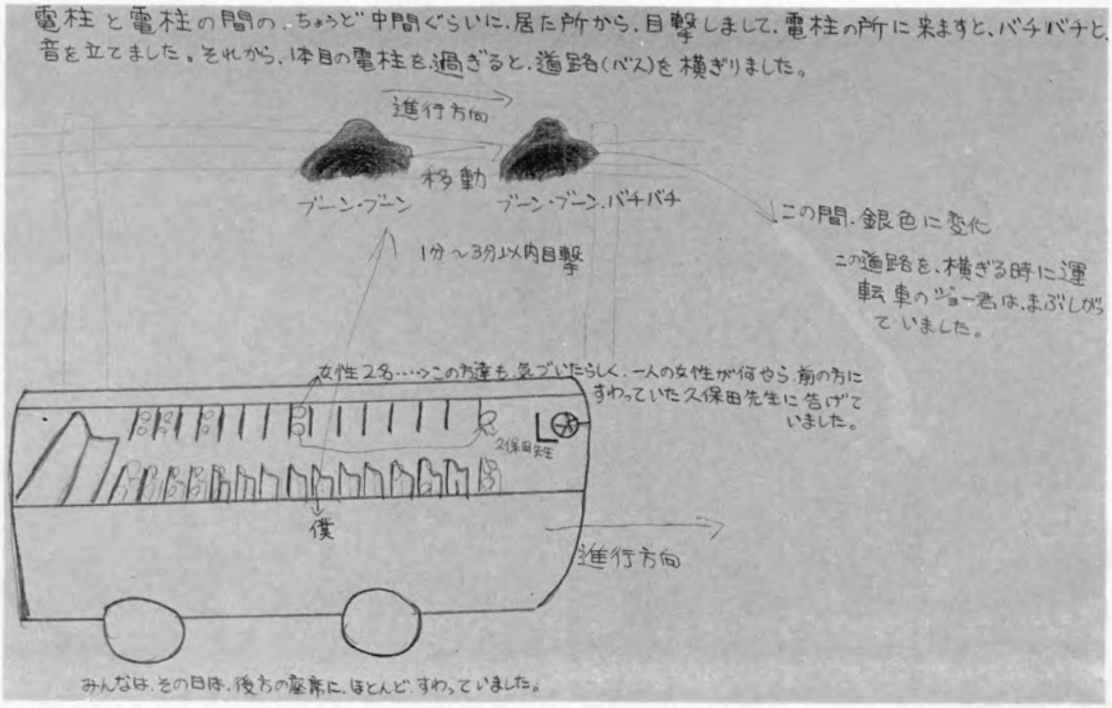
１年という歳月がすぎてから，『あれは円盤だったのですよ』と告げたことをお許し下さい。目撃時間は１分～３分ぐらいだと思います。距離は6.5～9mです。コニストン円盤に『ＵＦＯと宇宙』No. 22の表紙の円盤の色を取り入れれば85%まで僕が見た物と同じです。なお大きさはコニストン円盤写真とほぼ同じぐらいだと思われます。

その円盤は非常に低空を飛んでいまして，バスと進行方向が一緒でした。電線の近くへ来た時，バチバチと音を立てました。それと，見ているあいだはブーンブーンという音が聞こえました。それはフォースフィールドに包まれていて，まるで生きている実体としか言いようのない光景でした。信じられないことかもしれませんが，このことは事実です。ここに証言いたします」

編者が目撃したときは，すでに円盤が進行方向の右側から上昇して左側の方へ移動したあとであり，白銀色のリング状になっていた。円形の輪の中にＳの字に似た模様が見られたので，最初は飛行機が宣伝用に描いたサインだろうと思ったが，それにしてはかなりの時間くずれなかった。野口敏治氏（静岡市）も目撃され，ＳＪの文字に似た模様が輪の中に見えたという。編者にはＪの字がよく見えなかった。目撃時間は約３分間。疾走するバスの中から撮ったので，物体までの距離や大きさ，町名等は不明である。（ニコンＦ２フォトミック，ニッコールズーム28mm～45mm。撮影時は45mm，ｆ4.5開放。1/250秒コダカラー）

●カリフォルニア州の円盤。1957年８月13日午後６：30頃編者撮影。（中央より右手，太いポールのそば）

大久保千秋君のスケッチ

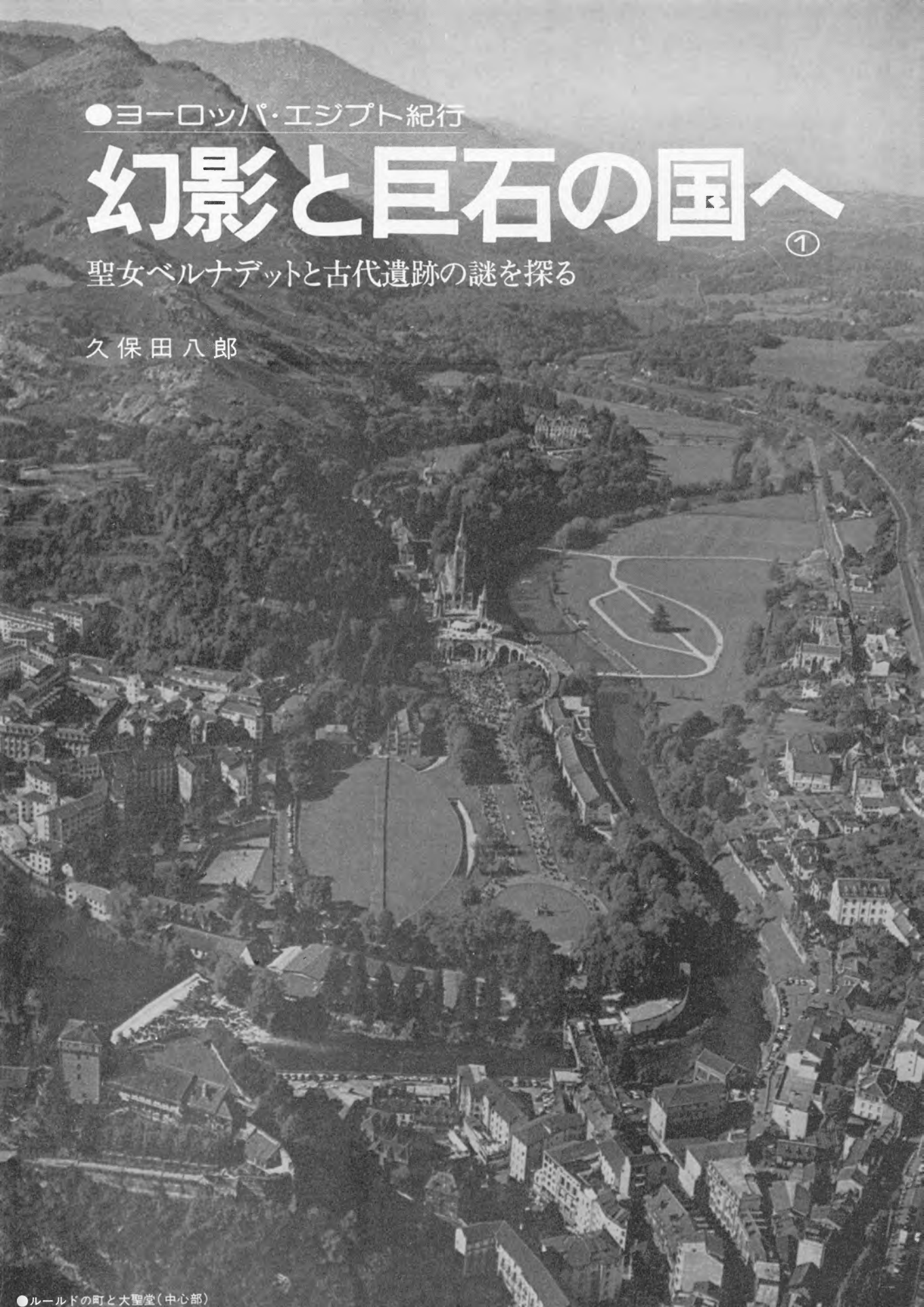


●ヨーロッパ・エジプト紀行

幻影と巨石の国へ①

聖女ベルナデットと古代遺跡の謎を探る

久保田八郎



●ルールドの町と大聖堂（中心部）

●結団式における早大・吉村先生の御挨拶

●筆者の挨拶

去る八月十三日より二十八日まで、ユニバース出版社とトラベル日本共催のもとに企画第二回の『エジプト宇宙考古学遺跡の旅』が実施された。総員三十五名で形成された旅行団の約半数は日本GAP会員であり、その他の方々も筆者のミステリー記事の愛読者で、終始和気あいあいたる雰囲気のなかに、パリを振り出しに中部フランスのヌベールと南フランスのルールドに残る聖女ベルナデット関係の史跡を見学したあと、またパリへ引き返し、ここでベルギーGAPリーダの、キース及びメイ・フリットクロフト夫妻と会見し、その後イタリアへ入り、ローマ、ナポリ、ポンペイの各遺跡を訪ねたあと、ギリシアのアテネ、コリント、ミケーネの遺跡をまわり、次にエジプトを訪問してカイロ市とギザの巨大なピラミッド群、サッカラの階段状ピラミッドなどに驚異の眼をみはり、続いてカイロ南方七百キロのルクソールへ飛び、ハトシェプスト女王葬祭殿、王家の谷のラムセス六世の墓、ツタンカーメンの墓、セティ一世の墳墓等を一巡し、ふたたびカイロへ帰ってイスラム文化圏のエキゾティシズム（異国情緒）を満喫した後、帰途はインドのデリーへ立ち寄り、市内を観光して、予定どおり二十八日の昼過ぎに成田空港へ無事帰着した。旅行中二度もUFOが出現するという幸運にめぐまれて、旅行は大成功裡に終了した。関係者各位に深謝する次第である。

（掲載写真の大部分は筆者撮影のものであるが、現地の集合記念写真その他若干は野口敏治氏の撮影であり、現地入手資料の複写も少しある）

新設の成田空港から私たちがエアー・インディアのB707機で飛び立ったのは八月十三日午後二時近い頃だった。深い安堵感と新たな好奇心とが交錯するなかを、機は一路ホンコンを目指して飛行する。この旅行が実現するまでに提携旅行会社たる国際アカデミックセンターの田中氏とともに十数回の打ち合わせ、企画の練り直し、関係各方面への接衝、連絡、東京と大阪での各二回にわたる説明会等、二人で東奔西走したあげく、やっと出発機の後部座席に腰をおろすことができたというわけで、感慨ひとしおなるものがある。特に職務とはいえ田中氏の努力には脱帽のほかない。氏は昨年夏の中米宇宙考古学遺跡の旅にも提携社の添乗員として同行されたので、私とはすでに親しい間柄であり、気心は互いに知れている。誠実な人だ。

「ついに実現しましたね」

隣席の氏と微笑しながら語り合う。だが旅行は始まったばかりだ。団長としての重責を思うと、のんびりとしていられない。今回の旅行には科学評論家の斉藤守弘氏も同行されたので、機中、UFO問題について楽しく語り合った。氏は温厚篤実な方で、決して感情的にならない人である。

約四時間の飛行後、機はホンコン空港へ着いた。時間があるので乗客は空港ロビーへ休憩に出かけて行く。ここの係官の手荷物検査は厳重をきわめ、バッグの中味を根こそぎ調べて、カメラを取り出してシャッターを押してみよと言う。これでフィルム一カット分が無駄になる。カメラにみせかけた殺人用の兇器かどうかを調査するものらしい。

成田空港で待機中に軽食堂で食事をとった際、カウンターへ扇子をおき忘れたことに気づいたので、ホンコンで一本買おうと思い、空港内ロビーの免税店で探したが、安物の紙製が見当たらず、高価

●成田空港での全員自己紹介。中央は斉藤守弘氏。

●機中のわが旅行団。睡眠ではなくて瞑想中？

な象牙のものしかない。ホンコンの宝石はほとんどニセ物だと聞いているので、これらの扇子もプラスチックではないかと思ったが、人一倍暑がりやの私はこれがないと具合のわるいこともあるので、比較的安いのを一本買い求めて機内に帰った。

機体は上昇してバンコクに向かう。成田を出発してまもなく、この飛行機には東京から有名な俳優のカーク・ダグラス氏が乗り込んでいることを日本人スチュワーデスから聞いたので、機内を歩くように頼んでくれと言うと、彼女の依頼を受けたダグラス氏は前方の席から立ち上がって愛嬌をふりまきながらあちこちの乗客と握手して後方へゆっくりと歩いてきた。近くで見ると、さすがに老けているが、往年の面影は残っている。コマーシャルの関係で来日したとのことで、デリーまで行くのだという。

そのデリーに着いたのは現地時間の夜十時半頃である。空港ロビーに入ると、大勢のインド人が二階の送迎室に待機している。到着する家族や知人を迎えに来ているのだ。私たちもしばらくここで休憩した。

ここのトイレの男子用入口のわきに初老のインド人が椅子に腰をおろして瞑想にふけるかのように腕組みをしながらすわり、横の女子用入口のわきにはそれの妻君らしい太った女が床にすわり込んでうつむいている。客をトイレに案内してチップをもらうのを業にしているらしい。前方から見ると写真のすばらしい被写体だ。だが残念なことに暗くて、三脚にカメラをのせてレリーズでシャッターを切らないと写らない。その三脚は大型スーツケースに入れたままだ。仲間のだれかに借りようかと思っているうちに、妻君がごそごそ動くので、急いで手持ちで撮影すると、彼女は立ち上がってどこかへ行ってしまった。この光景は全旅行中に眼にしたあらゆる被写体のなかで最高にドラマティックな場面だったのにと後々まで不手際を後悔した。こうした個人的な失敗をあげるとキリがないほどある。

過去三回にわたる海外旅行とちがって、今回の旅行は写真の本格的な撮影を主眼にし、機材に万全を期した上、フィルムもすべてコダクローム64を使用することにして四十本携行した。ニコン一台に加えてマミヤプレスと交換したペンタックス6×7を持って行こうかどうしようかと出発直前まで迷いに迷ったあげく、結局ニコンだけにし、交換レンズは二十ミリ、二十八ミリ、三十五ミリ（PCニッコール）、百三十五ミリの四本にした。そして重たい6×7をあきらめたことを後になって大いに喜んだ。これだけを詰め込み、更にその他の付属品やくだらぬ物を満載したバッグは相当な重量になり、旅行中、少なからぬ疲労の原因になったからである。カメラ機材は一グラムでも軽いほうがよいと高名な風景写真家・緑川洋一氏が書いておられたのを思い出す。これはプロや高級アマチュアにとって切実な問題なのだ。

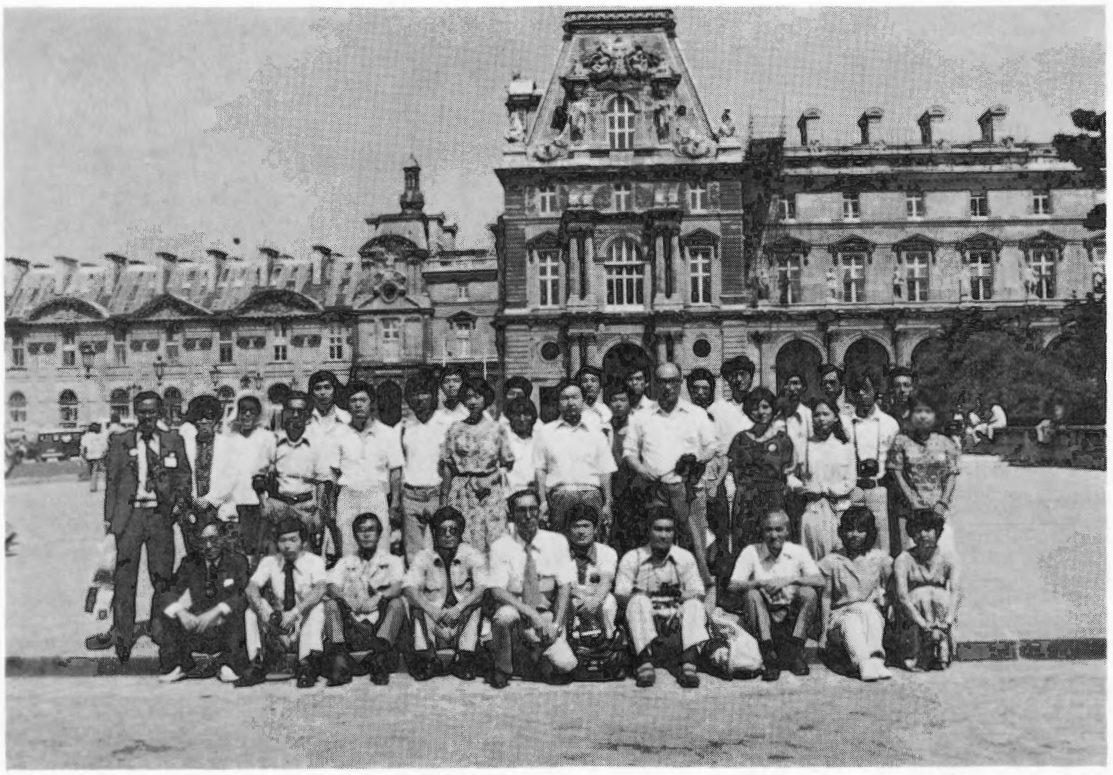
さて、デリーで飛行機を乗り換えて今度はジャンボ機で出発する。例によって機内で映画を上映するが、夜間のこととて眠りにつく。これから機は西ドイツのフランクフルトへ向かうので、朝までになるべく睡眠をとらねばならない。機体は微動だにしないが、さまざまの想念が去来して寝つかれない。加うるに日本を出発して以来、機内でたびたび食事が出る。これは旅客機側が現地時間に合わせて旅客の腹の都合にはおかまいなしに夕食だ、朝食だと出すためで、フランクを出てからパリに着くまでは文字どおり食傷気味になってしまった。

可愛い少女、ソーニャ

デリーから私の隣席にインド人の小さな女の子と母親がすわった。インド人の子供なら片言の英語はできるだろうと思って話しかけてみると、意外にも本物の立派な英語を話す。くわしく尋ねると、この娘は八歳で、カナダにいる父親のもとへ帰る途中だという。母親のたどたどしい英語の説明によると、娘はソーニャといい、二歳まではインドにいたが、その後、父親と共にカナダへ渡り、むこうで教育を受けているので、すでにヒンディー語は忘れて英語が母国語になってしまったという。わずか六年間英語圏内にいた小さな女の子が数十年間英語を勉強してきた私よりも本物の英語を話す実態をまのあたりにして、外国語の習得はとにかく〝慣れ〟であって、学問でもなければ暗記でもないことを腹の底から痛感したのであった。利口そうな可愛い娘で、私はいつしか自分の娘のような気がして、夜間は毛布をかけてやったりしたが、パリでは母娘とも心から別れを惜しんでくれた。

花の都のパリへ着く

パリのオルリー空港に着いたのは八月十四日の昼前だった。十時二十分到着の予定が遅れて市内観光の時間を少し削られたので、大急ぎで空港からバスで市内に向かう。最初はルーブル美術館である。パリ訪問は二度目の私にとって初回ほどの好奇心は起こらぬが、それでも歴史と文化の町としてヨーロッパ随一の感をいなめない。古びた建物や石の舗道のいずれにもフランス人の伝統を重んじる



●ルーブル美術館にて

保守主義と高度な知性がきらめいているように見える。この日と翌日のヌベール行きのガイドは現地在住の日本人石川氏。パリ大学仏文科卒、フランス語はフランス人同様に出来る方で、この人からは個人的にずいぶん有益な話を聞いた。

ルーブル美術館へ着いてからは、時間が充分にないというので、石川氏を先頭に、カルーゼル広場からデノン門の入口より入り、広大な館内をただひたすらに歩きまわる。氏も説明などをしている余裕がないらしく、容赦なく歩いて行くので、見失うまいとして一同もあとをついて行く。

このルーブル宮殿は中世の十字軍時代にフィリップ二世がセーヌ川を固めるための要塞として城壁を築いたのが始まりといわれる。十六世紀に入ってフランソワ一世がこれを王宮に改築し、以後、改築を重ねて宮殿の体裁をととのえた。当初フランソワ一世は十二枚の絵画を飾ったが、これをきっかけにルイ十四世治下に二千五百枚の名画のコレクションに発展し、その他ナポレオン一世が対イギリス戦略の一環として一七九八年五月に敢行したエジプト遠征の際に戦利品として持ち帰った古代エジプトの出土品や、ルイ十八世、シャルル十世、ルイ・フィリップ王などが権力と金にあかせて集めた莫大な美術品が展示されるようになり、一七九三年のフランス大革命以後は共和国美術館として一般に公開されるようになったのである。革命により王室は壊滅し、多数の王侯貴族はコンコルド広場のギロチンにより刑場の露と消えたが、貴重な美術品は残った。こうして各国の参観者の眼を楽しませているという次第。

現在二十万点にのぼるというこのぼう大な展示品をわずか一時間で見るのはもちろん不可能だが、せめてクールベやドラクロアらの代表的大作、特に後者の「シオの大虐殺」とかダビッドの「ナポレオン一世の戴冠式」の大画面などは同行者の皆さんにぜひとも観賞してほしかった。二年前に私がここへ来たときは、現地在住の若い日本人ガイドが有名な作品群についてすばらしく興味深い話をし、その博識ぶりに驚いたものだが、今回はそうはゆかぬ。時間がないのだ。

それでも私はダビッドの超大作の前でまたも針づけにされた。カラー写真が存在しない頃のことなので、このリアリズムに徹した迫真の名画に現われている多数の人物からは、尊大、傲慢、憎悪、嫉妬、屈従、愛、調和、高貴等、人間のもつあらゆる想念が放射されているような気がする。かたわらにいた膳氏(宝塚市)をふり返り、「これがルーブルの最高の名画ですよ」と言うと、「ナポレオンが司祭の手から王冠をもぎ取って自分で頭に載せたというあれでしょう」と蓄蘊のあるところを示される。

せきたてられる思いで館内を一巡して外へ出ると、一同はバラバラになっている。見物人でごった返す中を三々五々と出て来たのだからすぐにはそろわない。

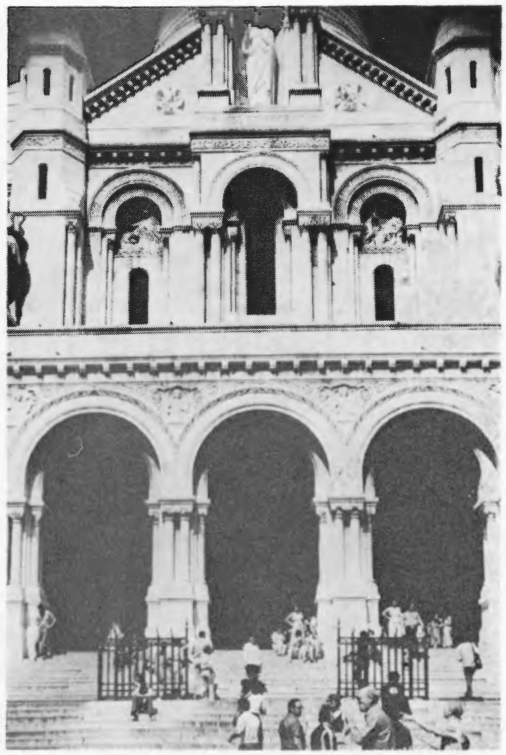
やがて館をバックに一同の記念写真を撮る。全員の記念写真撮影係は野口敏治氏(GAP会員・静岡市)で、ニコンELに三十五ミリF2をつけてセルフタイ

マーで撮る。カルーゼル広場の花壇はいつ見ても美しい。赤、黄その他の色とりどりの花が見事に咲き、そのレイアウトは旧館と新館とによく調和している。美術の好きな私は後髪を引かれる思いでふたたびバスに乗り込んだ。この広大な館内の展示品をくまなく見るには数ヵ月かかるだろう。私たちは短期間の旅行者なのだ。ここへ来ただけでも良しとしなければならぬ。

バスはモンマルトルの丘を目指して進行する。次の目標は丘の上にそそり立つサクレ・クール寺院だ。これはロマネスク・ビザンチン風の白亜の大建築で、特にドームの形が印象的である。しかしこれが有名なのは、大画家ユトリロやピカソその他が往時この丘に住んで画家の村を形成していたことがあり、特にユトリロは好んでこの大寺院を描いたからである。それにあやかってか、現在も寺院のそばのテルトル広場には昼間に多数の無名画家がたむろして絵を描いており、似顔を描いて即売したりする。この光景は二年前と全く変わらない。野外レストランもあり、広場の周囲には画商、土産物店などが並び、各国の観光客が押し寄せて、実ににぎやかだ。現地で解散しているあいだに私は写真を撮りまくった。ここは四方のどこを見ても被写体の宝庫ともいうべき場所で、三十六カット一本のフィルムはまたたくまになくなる。好天下で明るいためにASA64のフィルムでも結構高速シャッターが切れる。レンズ交換がわずらわしいので、同じボディー二台の必要をこの頃から痛感し始めた。日本を出る前の数ヵ月間、旅行にそなえてカメラのことばかり考え、あらためて写真の猛研究をやり、GAP会員のプロカメラマン斉藤隆君にもしばしば相談して万全の態勢をととのえたはずなのに、結局ボディー一台しか携行しなかったとは、私はよほどの間抜けにちがいない。写歴四十年のプライドはいつしか吹き飛んでしまった。

ふたたび大寺院の正面側へ引き返し、海抜百三十メートルの丘からパリ市内を見渡すと、すばらしい光景が展開する。出発前、東京は熱帯夜の続く記録的な炎熱地獄だったが、パリはこの日セ氏二十度程度で涼しくて、まるで別天地のような爽快な気分だ。

やがて一同バスに乗り、丘を降りる。パリ市北部の閑静な家並みを通りすぎて次第に中心部のシテ島へ進んで行く。ここにかの有名なるノートルダム寺院がある。シテ島というのはセーヌ川の中洲になった小さな島で、サン・ルイ島と橋でつながっている。ここには寺院やパリ警視庁、最高裁判所等があり、セーヌの南岸はサン・ミシェル広場、その東南地区がパリ大学を中心にしたカルチェ・ラタンである。パリは東京ほどにだだっぴろくはなく、地図を少し詳細に研究すれば



●サクレ・クール寺院

●テルトル広場

●テルトル広場の野外レストラン

●似顔絵画家たち

セーヌを境にして南北の地理状況はすぐ憶えられるので都合がよい。

ノートルダム寺院はフランス・ゴシック様式の世界建築史上最高傑作のひとつとして著名だが、一般ではむしろビクトル・ユゴーの「パリのノートルダム」で知られている。例のせむし男カジモドとエスメラルダの十五世紀における大ロマンの場所だが、これはフィクション（作り事）であって、ノンフィクション研究者たる私にはやはりナポレオンの戴冠式の実態が興味深い。薄暗い内部の上方に二個所のステンドグラスが美しく輝く。この建築は一一六〇年にモリス・ド・スーリー僧正が企画し、三年後に着工、実に二世紀半にわたる工事の末に完成し、一八四五年に大修復工事が行なわれて現在のような大伽藍となり、フランス・カトリック信者の聖地となった。二度目の訪問ともなるとやはり初回のような感動は起こらぬが、今回はあらゆる物を写真撮影の対象としているので、その意味で別な感覚がわいてくる。すべてを視覚的にとらえて映像化させようというわけだ。

この寺院には北塔と南塔があり、見学者は登れるらしいが、私たちにはその余裕はない。バスでセーヌの川岸を疾走するにつれて寺院の全容が遠ざかるのを見つめながらシャッターを切る。

そのあとコンコルド広場へ行く。前述のとおり、ここはフランス大革命の際にルイ十六世を筆頭として多数の王侯貴族がギロチンで首をはねられた場所で、その惨状は眼を覆うばかりだったという。十六世の処刑は一七九三年一月二十一日に現在のブレスト都市像の立つあたりで行なわれたというが、従容としてギロチン台の下に立ったその最後は王という権力者に恥じぬ立派なものだったと歴史は伝えている。

十八世紀中頃に作られたこの広場は一八五二年以後整備されて現在の姿になった。当初は『ルイ十五世広場』と呼ばれたが、後に『大革命広場』と改称された。

一七九三年五月から二年間にわたり千三百四十三名の大量処刑が行なわれ、名高いマリー・アントワネットや、革命の驍将ロベスピエールなどもここで殺されている。なにせ法秩序の混乱した時代で、政敵を捕えた者が官軍となって遠慮容赦なく首をはねる点は明治維新に似ている。英雄ロベスピエールもこうして悲惨な最後をとげたが、こうした歴史をふり返ると、ここにはカルマの法則が厳然と作用していることを感じさせられる。とにかく血なまぐさい場所だ。殺された者の怨念の波動が満ちているのだろう。

さすがに一七九五年以来はコンコルド（和親）広場と名称が変わった。

広場の中央にはエジプトのオベリスクが立っている。ナポレオンがエジプト遠征の際に分捕って持ち帰った物だとよくいわれているけれども、実際は一八三一年にエジプトの大守モハメッド・アリがフランスとの親交を求めてシャルル十世に贈ったもので、高さ二十三メートル、重量三百二十トンもあり、表面には古代エジプトの象形文字が彫り込んである。

この広場はシャンゼリゼ通りにつながり、正面のはるかむこうに凱旋門が見え

●ノートルダム寺院

●コンコルド広場

●凱　旋　門

●エッフェル塔を背景に（2列目右より田中氏，4人目筆者）

るし、右手のロワイヤル通りの彼方にマドレーヌ大寺院が望見できる。

そのあと凱旋門を見学して、エッフェル塔の近くのトロカデロ公園に接したシャイヨー宮の大テラスから塔を遠望する。ここも二年前と同様に観光客が押し寄せているが、今度は黒人たちがあちこちにすわり込んで民芸品などを売っている。写真を撮ろうとすると激しく拒否する。眼下にはドゴールが作った大噴水があるのだが、この日はどうしたわけか水が出ていない。これは『ドゴールの小便』といわれるほど名高くて、壮観な見ものだったことを記憶しているので、噴水が見られないのは残念だった。

いったいにパリには人名を冠した街路や公園、公共施設などが多い。しかも世界最大級の空港を『ドゴール空港』、凱旋門のある広場を『ドゴール広場』などと名付けているところをみると、この人物がいかに偉大であったかが察知できようというものだ。わが国の施設が『タナカ空港』『フクダ広場』と呼ばれることはまずあるまい。ドゴールのごときケタはずれの大国家指導者に比較すれば、日本の政治家は――、いや、それよりも国民性の相違によるのだろう、と考えながらテラスを降りて、池のそばを通り、士官学校側の広場に集まって全員の記念撮影をする。

わずか半日の市内見学だから、まだ表通りをさっと通り過ぎたにすぎないが、明日も十七日も自由行動でパリをゆっくり観賞してくださいと仲間の人たちに話しかけながらバスでホテル『ノルマンディー』へ到着する。

夕方は田中氏と二人でフランス料理店『シャンパーヌ』へ行く。カキ料理で知られた店で、鉄板で焼いたのを食べるとすごくうまい。店内は満員だが、客はすべて白人ばかりで、日本人は我々二人だけだ。こうなると妙に気分が落ち着く。ワインは私の口に合わぬので、ウイスキーの水割りを飲みながら大いに語り合った。

ヌベールへの楽しいバス旅行

明くれば八月十五日。きょうは中部フランスのヌベールにあるサン・ジルダール修道院へ聖女ベルナデットの遺体を拝観に行く日である。早朝六時に起床し、七時半に全員バスに乗り込んでホテルを出発する。ガイドは前日同様、石川氏である。片道約三百キロあるので、その間フランスの美しい田舎の風景が展開するのをながめながら、世界一といわれるフランスの高速道路を飛ばして行くのは快適だ。沿線に商品の立看板類が眼につかぬので石川氏に質問すると、フランスでは自然の美観をそこなわぬように看板を立てることは法律で禁じられているという。たんぼの真ん中に巨大な酒の広告塔を立てたりする日本からみれば、うらやましい話だ。

こじんまりとしているけれども、まるで積み木細工のようなスタイルの美しい家が次々と窓外を流れてゆく。日本の家屋と比べて、どうしてこうも相違があるのだろう。しかも個性の強いフランス人

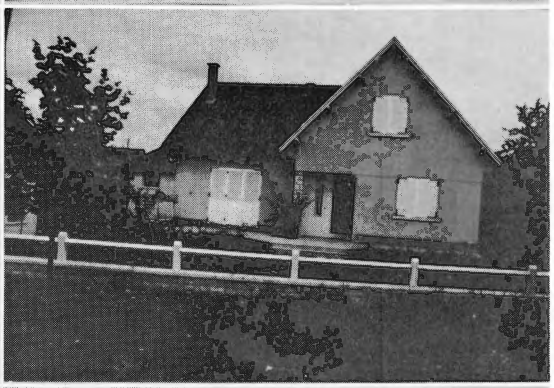
は他人のものまねをしたがらず、家のスタイルがみな違うのである。

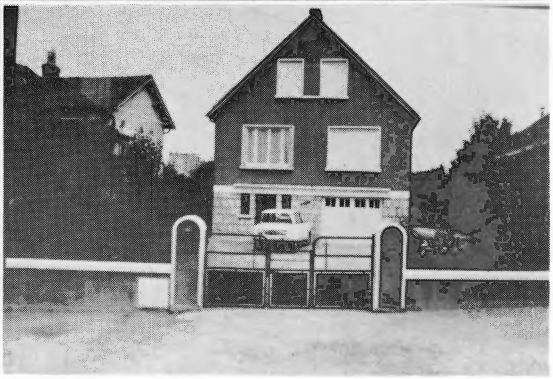
道中、石川氏から日仏の比較文化論を大いに聞いたが、これは傾聴にあたいした。発音のむつかしいフランス語を日本人がマスターするのは容易ではないが、成長してから渡仏してフランス語を学び、血のにじむような努力をしてフランス人同様に語学を身につけた氏の体験は、オトナでも努力次第で必ずマスターできることを実証した好例だろうとも言われる。氏はいずれ日本へ帰って大学の教壇に立つ予定らしい。

ヌベールに近づいた頃、ロアール河畔のある古い寺院に立ち寄って見学する。七〜八世紀の建立になる石造の大伽藍の中へ入ると、ちょうどこの日は聖母昇天祭のため、土地の大勢の信者が集まって

●ヌベールを目指してバスは疾走する

●個性の強いフランス人は他人のまねをしたがらず，家のスタイルもみな違う。
（ヌベールへ行くバスの中から撮影）





ミサが行なわれている最中だった。フランスは強大なカトリック信仰に支えられた国だから、こうした宗教的色彩を無視するわけにはゆかない。これを理解しないでフランスを知ることは不可能なのだ。パリやその他の町の表面だけを見て歎息するのは単純すぎると石川氏は言う。だが寺院内の神々しい雰囲気は私たち日本人にとっておよそ無縁なもので、ここは次元の異なる世界である。人種の相違というものをイヤというほど感じるには、こうした聖堂内の儀式に参列するとよいだろう。

寺院を出てふたたびバスに乗り、ヌベールの町に着いたのは昼頃だった。小さな田舎町かと思っていたが、ちょっとした小都市である。昼休み中に修道院長を訪れるのは大変失礼になるので、昼食をすませてから行くほうがよいという石川氏の忠告に従って、一同は町のレストランに入る。この食事が、わが旅行団全員が一堂に会してとった最初の会食であった。食事前に石川氏と打ち合わせたとき、日本人はものを食べるときに口の音をペチャペチャさせるので、気になると氏がささやく。食事どきに口の音をさせるのは日本人だけだといって白人社会から軽蔑の的になっている事実は日本で全く知られていないが、これは習慣の相違といってすまされない重要な問題なのだ。フランス的な高度な教養を身につけておられる石川氏は大挙してパリに押し寄せる日本人の不作法さに常日頃苦い思いをしているらしい。そこで私はキラワレ役を買って出ることにして、食事前、皆さん方におそるおそる注意事項を伝えたが、幸い、穏和にして賢明な皆さんは卒直に了解され、以後、日本人の集団としてはまれにみる立派なマナーを心得た旅行団であると、行く先々の関係者から賞賛されるに至ったのである。添乗員の田中氏は過去数十回にわたって海外旅行団の世話をされた大ベテランだが、集合時刻に十分間の差もなしに全員が集まるのはこの旅行団だけだと何度も強調された。人間の集団には理解と調和というものが最重要であることを痛感した次第。

さて食事が終わってから、いよいよサン・ジルダール修道院へ行くのだが、その前に聖女ベルナデットについて簡単に述べておきたい。

聖女ベルナデットの奇跡的事件

今を去る百二十年前南フランスのピレネー山脈のふもとにあるルールドという寒村にフランソワ・スビルーという実直な男が妻子五人と共に精粉業を営んでいたが、事業に失敗して極貧におちいり、乞食に近い生活を続けていた。四人の子供の長女でベルナデットという娘があり、生来虚弱な体質で、ひどい喘息もちの上、学校に行けないから字もろくに読めぬという無学な十四歳の少女だったが、純真で快活な正直な娘だった。

一八五八年二月十一日、ベルナデットは妹のマリー、隣家の友達ジャンヌと共に村はずれのガーブ川のほとりへ薪ひろいに出かけた。二人の娘が浅い川を渡ってからベルナデットがどうしようかとためらっていたとき、突然がたわらのマッサビエル洞窟の入口の前に世にも美しい貴婦人が出現したのを見た。年齢は十六、七歳、純白の長いガウンをまとい、やさしく手招きする。ベルナデットはひざまずいて恍惚となりながらロザリオをとなえる。やがて貴婦人は一礼して静かに洞窟の中へ入って行く——。

これが有名なベルナデットの神秘的な体験の第一回目である。他の二人の少女には貴婦人の姿が見えなかったので、これはベルナデットにしか目撃できない一種の幻影であって、生きた人間ではないことが判明した。

こうしてベルナデットは貴婦人の要請により十五日間、この洞窟へ日参して幻影とコンタクトし、毎回何事かを長時間語り合うので、見物人が次第に増加し、最終日には実に二万人の大群集が洞窟前に集まった、そして『聖母マリアの幻と会見するベルナデット』としてフランス全土にその名が響き渡るようになった。

その後三月二十五日にもまた洞窟で貴婦人の幻とコンタクトする。このとき相手は「私は無原罪の受胎です」と言う。七月十六日は一連のコンタクトの最後の日で、このときは官憲の弾圧により洞窟に近づけないために、ガーブ川の対岸の牧場で対面したが、その光景は数千人の群集も目撃した。

神秘はこれだけではない。その前の二月二十五日のコンタクト時に、貴婦人から命じられるままベルナデットが地面を手で堀ったところ、泉が湧き出た。そし

●ベルナデット（22歳の頃）（現地資料）

て次第に水量を増してガーブ川に注ぐようになった。ところがこの泉の水を飲んだり浴びたりする人のなかに奇跡的に難病が治癒するという現象が発生し始めたのである。これは『ルールドの聖泉』として世に拡まり、現代に至るまで世界のカトリック信者の難病患者にとって霊薬とされているのである。

治癒現象で名高いのは、一九〇三年五月末にマッサビエル洞窟前で発生したマリー・フェランという十九歳の少女の事件である。結核性腹膜炎で腹が太鼓のようにふくれ上がって危篤状態だったのが数分間で治り、完全な健康状態に立ち直ったのだ。この一大奇跡はマリーに付き添っていたノーベル受賞の大生物学者アレキシス・カレル博士が目撃し、その詳細な手記が『ルールドへの旅』と題して出版されてから一躍有名になった。

ルールドの聖泉につかったり水を飲んだりする人に百パーセント奇跡が発生するわけではなく、治癒率は二十ないし三十パーセントで、現代でもそうらしい。しかし医師から見離された難病が一人でも治れば、それはやはり奇跡であり、この事実を否定することはできない。要は率よりも事実が重要なのである。

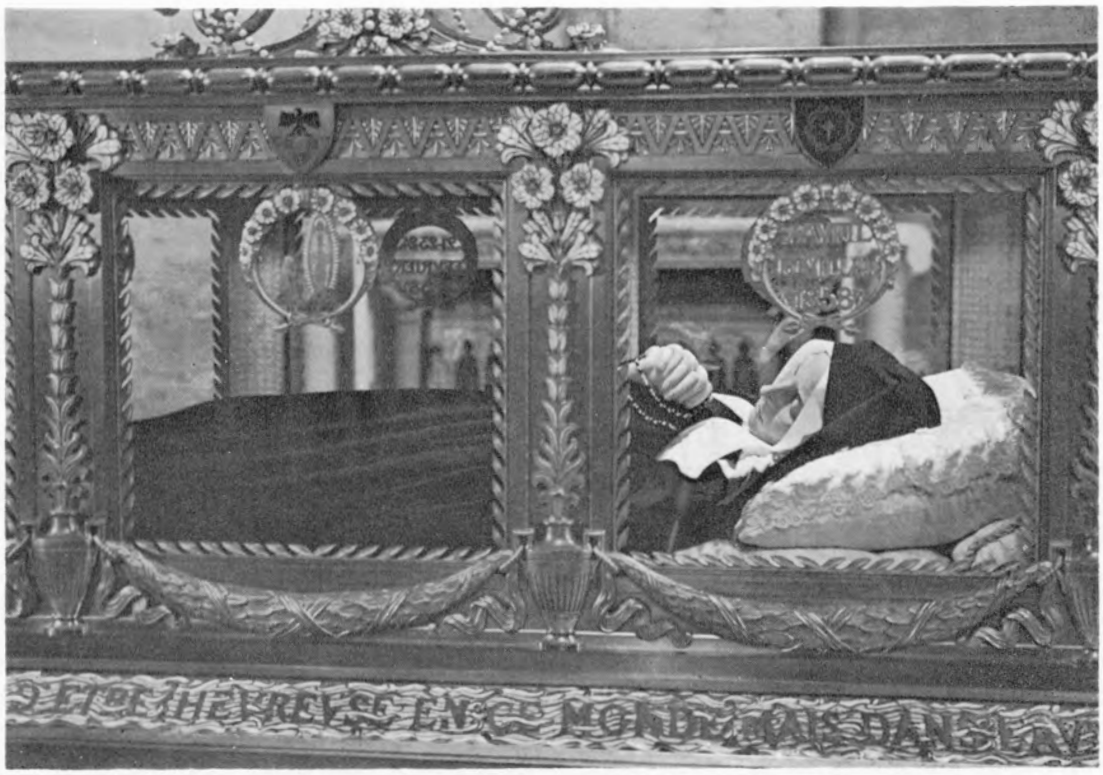
さて、ベルナデットは一八六六年七月四日にルールドを離れて、中部フランスのヌベールにあるサン・ジルダール修道院へ移り、ここで修道女として病苦と激痛に苛まれながら比類のない立派な生活をすごし、ついに一八七九年四月十六日午後三時十五分、自室のひじかけ椅子にもたれ、両足を向かい側の足台にのせたまま三十五歳をもって謎と波乱の生涯を終えたのである。

しかしまだ奇跡は続いた。防腐処置を施したわけではないのに、遺体が腐敗しないのだ。四月十九日には盛大な葬儀が行なわれ、同修道院のサン・ジョセフ聖堂の地下に葬られた。死後三十年後の一九〇九年九月二十五日に遺体の堀り出しが行なわれたが、このとき九名の立会人は驚異の眼をみはった。遺体は生前そのままの状態で、肉づきもよく、逝去時の姿が出現したからである。

続く一九一九年四月三日の第二回目の遺体検証時には完全にミイラ化していたものの腐敗しておらず、一九二三年十一月十八日の第三回目検証でもやはりミイラ化したままだった。ただし顔が黒ずんでいるためにパリのピエール・イマン商会が薄い臘マスクをミイラの顔と手にかぶせて死亡時のベルナデットの顔が再現してある。その遺体がサン・ジルダール修道院に安置公開されているというわけである。

ベルナデットの生涯についてはユニバース出版社の『UFOと宇宙』誌一九七七年九月号と十月号に二回にわたって連載された私の拙文『奇跡！ ルールドの聖泉』を参照されたい。この聖女の驚くべき実話は、むかし『ベルナデットの歌』その他の題名で外国で数度映画化されて日本でも公開されたし、全世界のカトリック信者間ではルールドが一大巡礼地として信仰の対象になっているが、日本ではほとんど知られておらず、サン・ジルダール修道院を訪れる日本人はまれであ

●ヌベールのサン・ジルダール修道院全景（現地資料）



●サン・ジルダール修道院に眠るベルナデットの遺体

る。そのような場所へカトリック信者でない私たちが巡礼に行くのは日本人の団体としておそらく最初だろう。

ベルナデットの遺体を拝観

一同はサン・ジルダール修道院へ着いた。エの字型に棟の連なった二階建の広大な建物で、受付で石川氏が来意を告げた。実は日本を出発前、ルールドに在住される鈴鹿恵美子女史に連絡をし、日本人の団体が行くのでよろしく頼むという旨を女史からこの修道院長へ一筆伝言して下さいと依頼してあったので、すぐに院長が入口へ出て来られるか、または私と田中氏、それに通訳として石川氏の三人がまず奥の院長室へ招じ入れられて挨拶を交わすのであろうと予測し、土産物まで用意してきたのである。

しかしすぐに拝観OKとなり、中庭に面した礼拝堂の入口からぞろぞろ入ると、右側の奥の方に細長いガラス張りの大きなケースがあって、その中に写真で見覚えのあるベルナデットの遺体が安置してあるのが眼についた。ケースの手前三メートルの位置に木の柵があり、ここから奥へは近寄れない。

「やっと見た！」

私ははやる心を押さえながら早速写真撮影にとりかかった。同行の皆さんはカトリック信者ではないから十字を切って祈ったりしないが、敬虔な気持で内心祈りながら長椅子にすわっていることはフィーリングで充分にわかる。フランス人の拝観者も数名すわっている。

限られた短時間内になるべく多数の写真を撮らねばならず、しかも私だけの占有場所ではないので、迅速に行動する必要がある。柵のそばに三脚を立てて続けざまにレリーズでシャッターを切る。ストロボの電池が古いらしく、すぐには点灯しないので、いらいらする。レンズを三十五ミリから百三十五ミリに切り換えたり、偏光フィルターをつけたり、大あわてで撮っているうちに、修道院長が見えたと田中氏が呼びに来た。急いで上衣を着て外へ出ると意外にも五十歳なかばに見える婦人がにこやかに微笑しながら立っている。いかめしい老人の院長を想像していたものだから、あっけにとられて挨拶をすると、上品なフランス婦人は達者な日本語で「こんにちは。よくいらっしゃいました」と言うので二度びっくり。

聞けば、この婦人修道院長は日本の京都や大阪に十七年住んだことがあり、そのため日本語は相当に流暢で、日本の事情にもくわしいらしく、しかも姓もベルナデットだと言う。これで通訳なしに直接日本語で話し合うことができた。旅行の企画中、修道院訪問時に現地在住の日本人修道士か修道女がいて案内をしてくれるといいのだがなあ、と田中氏と何度も話し合ったものだが、なんのことはない院長自身が日本人同様に話せるのだ。それを全然知らなかったとは！

土産物を渡して、ルールドの鈴鹿さんという女性から手紙が来ているかと尋ねたら、受け取っていないと言う。何かの手違いなのだろうと思いながら、撮影の

ことが気になり始めたので、あとで、ということにして、また安置室へ引き返し、撮影を続けるうち、「もっと接近して撮れ！」という内部からの強烈な衝動がわき起こるのを感じた私は、レンズを二十八ミリに換えていきなり柵を乗り越えてケースのそばに寄り、ベルナデットの顔から五十センチばかりまで近づいて中腰で続けて二カット撮影した。後方で女性たちがクスクス笑う声が聞こえる。すると一人の修道女がやって来て注意したので、詫びながらすぐに元の位置へ返った。われながらどうしようもない衝動だった。

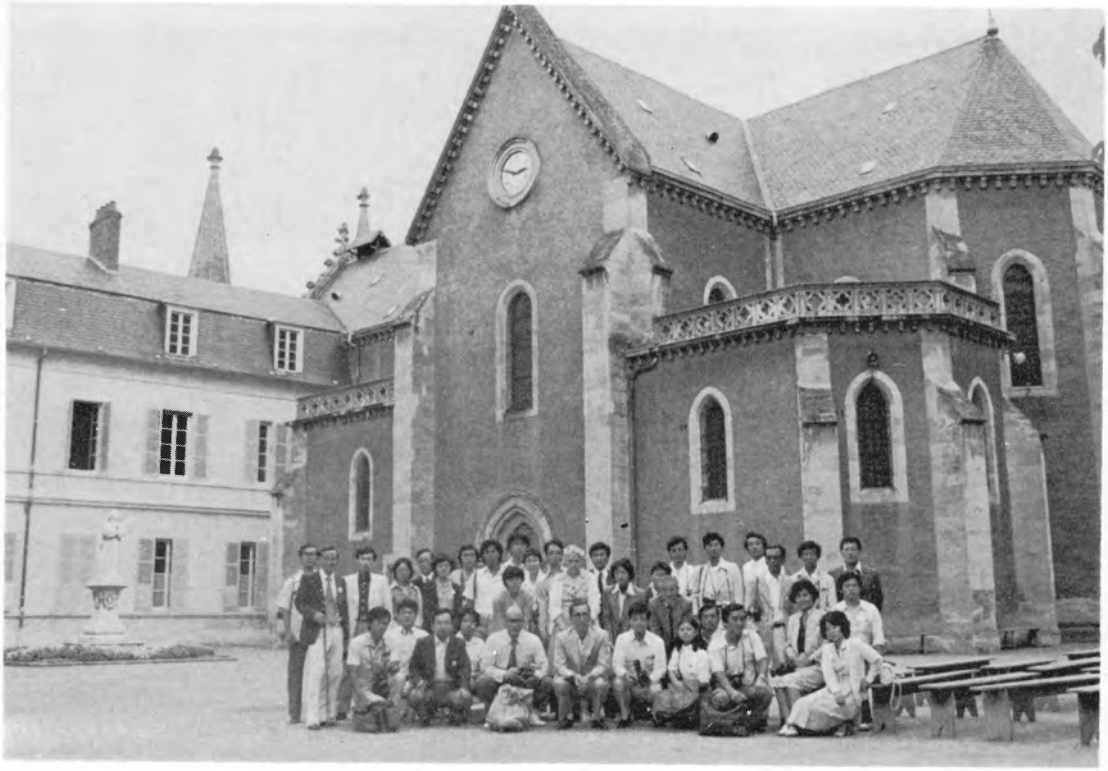
「この罰あたりめが。そんなことで奇跡など起こるものか！」と修道女は思ったことだろう。

やがて一同は中庭へ出て、前館の中へ入る。院長により二階へ案内されてベルナデット最後の部屋へ入る。かなり広いが、内部はガランとして、正面に祭壇らしき台があり、椅子が二十脚ほど散在する。ベルナデットが息を引き取ったという寝椅子と足台は院内の別な場所に展示してある。板張りの室内は何度も修理されたらしい。やがて一同はこの部屋を出て、また中庭へ集まり、院長を中心に全員の記念撮影をする。雨が降りそうなどんよりした天候なので、早く写せと院長が野口さんに日本語でせきたてる。

撮影が終わって一同が修道院を辞してバスで出発したのは三時半頃で、ふたたび敷石をしきつめた立派な高速道をぶっ飛ばしてパリ市内へ入ったのが七時半頃である。途中、中華料理店「黄山」に立ち寄って久方ぶりに中華料理を賞味する。パリには日本料理店は少ないが、中華料理店は約三百軒あるというからオドロキだ。安くて油っこくて、うまいというのが白人にうけるらしい。

●修道女時代のベルナデット(24歳)(現地資料)

●サン・ジルダール修道院礼拝堂前にて（２列目中央の婦人がベルナデット院長）



憧れのルールドへ

ホテルへ帰ってからはのんびりしている余裕はなかった。今夜の夜行列車で、いよいよルールドへ出発するのである。全員スーツケース類をまとめてバスで九時頃ホテルを出てオーステルリッツ駅へ向かう。ヨーロッパの大半の駅がそうだが、この駅もなんとなく雑然として薄汚れた感じで、日本の新幹線駅のようなスマートな駅舎ではない。大型スーツケース類三十五人分を敏速に列車に積み込むことをかねてから田中氏が心配しておられたが、これはポーターがうまく処理してくれた。

プラットフォームでは坊主頭の若い男たちが大きな袋をかついで大声でわめいたりしている。あとで判明したが、彼らは兵隊なのだった。

一同が乗り込んだ列車は二等寝台車で一コンパートメントの片側に三段、向かい側に三段、計六段のベッドがある。日本にもこれと似た寝台車があったが現在は大体に二段式に切り換えられている。フランスのそれは下段と中段の天井が低いために、もぐり込んだら横になるより他に方法はない。上段のみ丸天井が高いので寝台上に背を伸ばしてゆったりとすわれるのだ。大男の私を気の毒がった川上氏（東京）が上段をすすめてくれたので、感謝して屋根裏寝台へ上がる。

列車は九時五十三分にホームを出た。日本の駅のようなけたたましいアナウンスメントも発車のベルもなく、静かに動きだす。日本では数十回も寝台車に乗った私だが、これに乗ると一睡もできない性分なので、今夜もどうせ眠れぬだろうとあきらめて、枕元のランプをつけて読書したりメモを記したりする。

昨年、アメリカ・メキシコ旅行に参加された成瀬氏（大阪）はサンフランシスコからの帰路の機中で「自分は寝台車で眠れぬことはない。しかも揺れるほどよく眠れる」と話しておられたが、その成瀬氏が今度の旅行にも参加しておられるのだ。昨年の夏の話を思い出しながら、もう氏は熟睡中なのだろうと、うらやましくなる。

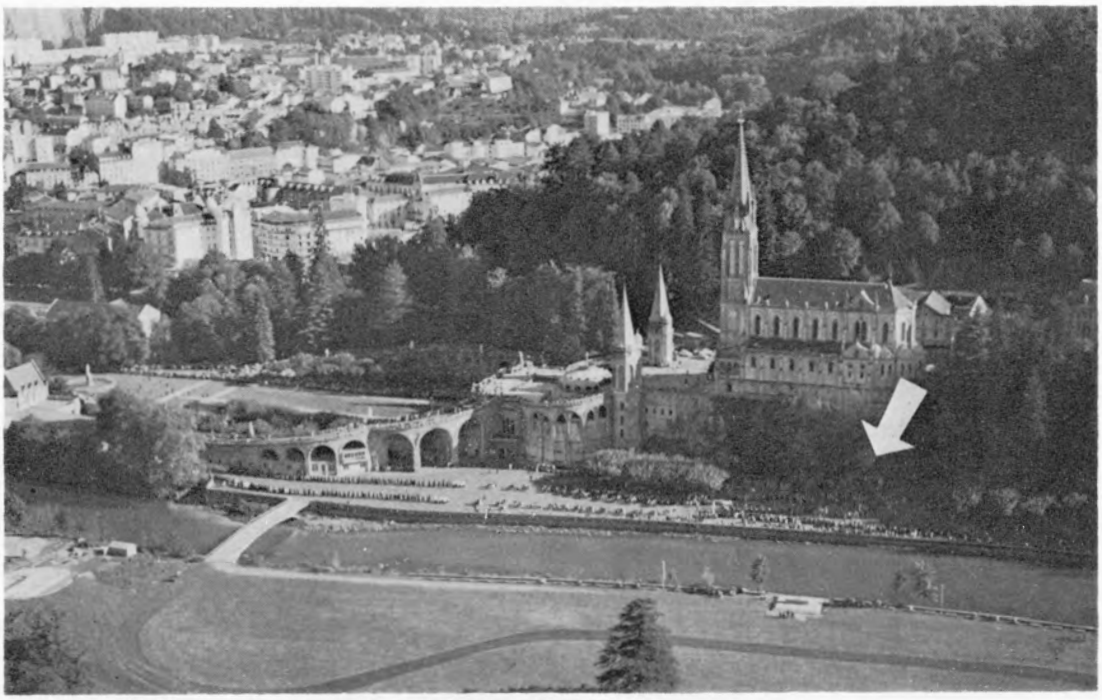
深夜、用を足したくなり、通路へ出ておどろいた。例の若い軍人たちが所せましとばかりにゴロ寝をしているのだ！軍服を着ていないから浮浪者のようにしか見えない。日本の列車では考えられぬことだ。彼らの顔の上をまたぎながら、やっとの思いでコンパートへ帰る。

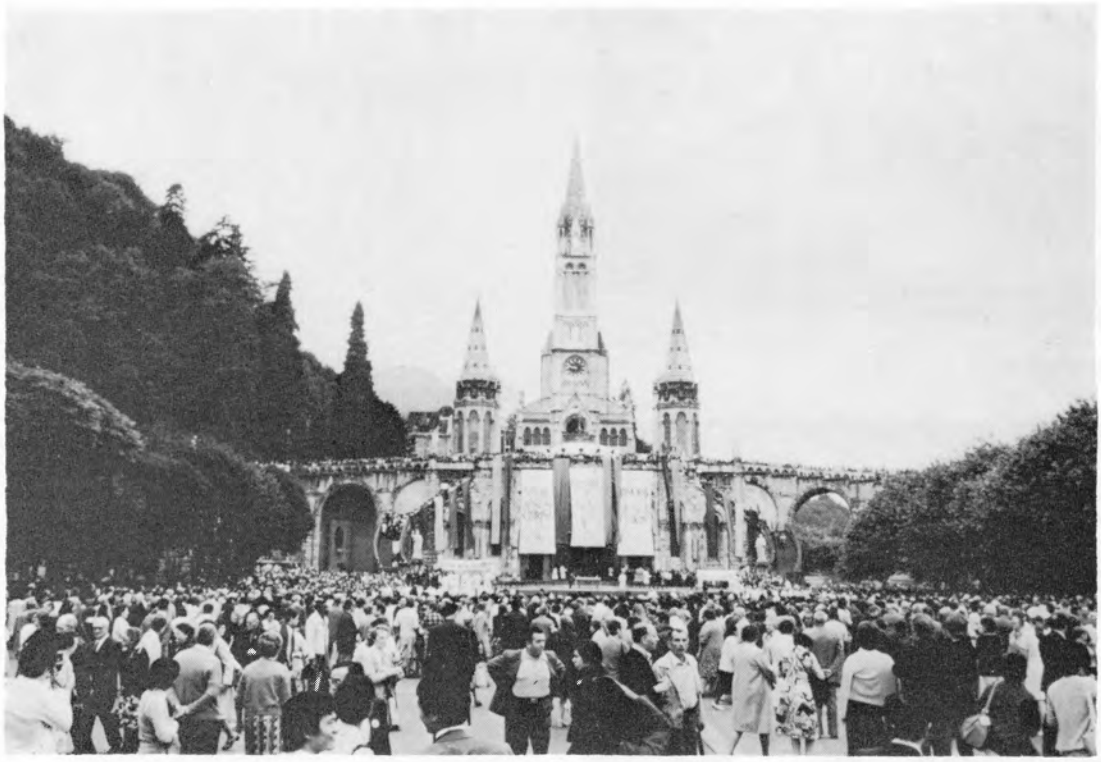
寝台へ身を横たえてもやはり眠れず、さまざまの想念が去来する。この寝台車には日本のそれのようにカーテンがないから、各人の寝姿は丸見えだ。マインド（心）を静めて内部の意識との一体化を図る〝宇宙瞑想〟をしばらく行なう。

明くれば十七日、早朝七時半頃に列車はルールドへ着いた。この列車はタルブ行きなので、短い停車時間中に三十五名の人間と荷物を全部降ろさねばならぬがこれもうまくいった。

ルールド駅はこじんまりとして清潔で待合室へ入ると朝のさわやかな冷たい空

●ルールドの町と大聖堂。手前はガーブ川。矢印の個所がマッサビエル洞窟（現地資料）





●大聖堂前広場の群集（8月17日午前11時頃）

気が流れ、実に爽快だ。連絡済の鈴鹿女史が迎えに来ておられるだろうと思い、あたりを探すが見あたらない。

しかし、やがて女史が現われた。まだ若くて、年齢は三十歳ぐらいか、上品な顔立ちの女性である。当初は修道女かと思ったが、そうではなく、信仰心向上のための訓練センターみたいな施設にいるという。私が『UFOと宇宙』誌に連載した記事はすでに送ってあるので、当方が単なる物見遊山やひやかしで来たのでないことは充分にご承知のはずだ。むしろ一同が熱烈な憧憬をいだいてやって来たということは直ちに了解されたらしい。この方が今日一日のルールド案内役を奉仕して下さるのである。私は心から感謝した。

女史の先導でバスに乗り、荷物類を車体のどてっ腹の貨物室へ収納して、ホテル『アンベリアル』へ行く。中規模ながら立派なホテルだ。ここの階上のロビーで各自のスーツケースを開いて身仕度をととのえているあいだ、女史がルールドやベルナデットに関して事前の説明をされる。その言葉はまことにおっとりして落ち着きがあり、常に明るい微笑を浮かべて、いかにも信仰に徹しているかのようだ。

十時に全員がホテルを出た。聖域は近いというので徒歩で行く。町へ入ると、土産物店がずらりと並び、各国から来た大勢の善男善女でにぎわっている。一大奇跡の町として大発展をとげたらしい。こうまで観光地化されているのかと、驚きながら聖域へ入って行く。広大な大広場の彼方に大聖堂があり、数万の大群集の中をスピーカーで神父の祈りの声が響いてくる。昨日が聖母昇天祭なので、多数の信者がこの町へ押し寄せたのだ。

私たちは女史の誘導により、すぐに洞窟へは行かないで、まずガーブ川をへだてた元牧場の広い草原地帯へ行き、岸辺から望見した。対岸には洞窟が見え、その前にも大群集がたむろしている。到る所、人また人で、大変なにぎわいだが、日本の祭礼のような喧騒さはない。一種独特な静寂と敬虔な雰囲気を感じる。フランス人の男女の年輩者が多いが、都会人らしい人は見あたらない。地方人らしい質素な身なりの純朴な顔付きの人ばかりである。

私たちは川岸からカメラをかまえて対岸の洞窟を撮影し続けた。百三十五ミリ

●鈴鹿恵美子女史（右）とフランス人のガイドさん

レンズで狙うと絶好の画面が展開する。清冽なガーブ川の流れ、岸辺に腰をおろした群集、黒い洞窟をバックに浮き上がる白いマリア像――。

ルールド訪問の願望を果たした歓びが全身にみなぎり、美しい光景の映像化に陶酔しながらいつまでもシャッターを切り続ける――。

女史のせきたてる声にふと我に返ると、一行は前方へ歩いて行く。緑の芝生をしきつめた広い野原を横切って、ガーブ川にかかる橋を渡る。途中で立ち止まると川の彼方に大聖堂が右手に見えてこの光景もすばらしい。ここでも数カット撮影する。

●大聖堂下の人々

聖泉の水を浴びる

川を渡ると聖泉の水浴場へ出た。当初は大きな岩風呂のようなもので、男女が海水パンツで水浴するのかと思って、そのことを来る前に鈴鹿女史に話したら、彼女は吹き出して、そうではなくて、男女別に聖泉の水浴所があり、奉仕人たちの手で浴びせられるのだという。要領を得ないまま、とにかく折角来たのだから有志だけで聖泉へ入ろうではないかと衆議一決し、まず男子専用の水浴所へ行ってみた。

山麓に設備されたコンクリートの建物があり、向かって右側が男子用で左側が女子用の水浴所になっている。女子用の前にはすでに長蛇の行列ができて順番を待っているが、男子用は空いているようだ。よし、今だ、とばかり私はこわごわと入口の中をのぞいてみた。ここは無料で、だれでも水浴ができるのだ。

●聖泉水浴所。婦人たちは行列をなしている。

内部には数名の屈強な男がいて、私を見るなり中へ入れと手招きする。見ると二坪ほどの狭い脱衣場があり、ここで衣類を脱いでハダカになるのらしいが、カメラバッグにはパスポート、旅行者用小切手、財布等、貴重品があるので、うかつに置けないという不安感がつきまとって、ためらっていると、早く脱げと男がせきたてる。やむなく服を脱ぎ、サルマタひとつになって奥の浴槽の方へ行こうとすると、男がサルマタも脱げという意味の合図をする。全裸になりたくない私は手を振って拒否すると、三人の男が早口のフランス語でまくしたてる。全裸にならないとだめだと言っているらしい。そこでトボけることにして、「私は日本人だ。あなたがたの言っていることはわからない」とフランス語で答えると、やにわに一人の男が青色の厚い布を下半身の前部にあてがうや、他の男がいきなりサルマタを引きずり降ろしてしまった。そして青い布を腰に巻きつけたまま二人の男に両手を取られて奥の長方形の浴槽に入れられた。大勢の人が水浴するので水は白くにごり、きたならしくて、義理にも聖泉とは言いにくい。しかも膝までしかない水は意外に冷たい。奥の壁に小さな祭壇があり、そこに可愛いマリア像が安置してある。一人の男が左側からそれに接近して、祈るからお前も祈れと言う。そこで日本式に合掌して、心中「有難うございます」と念じた。すると両腕をつかんでいた二人の男が力まかせに私の体を後ろへ引き倒した。あっと思うまもなく、首から下が冷水につかり、体が縮みあがる。

「わーっ、やれんどォ!」と内心大声で叫んだとたん、すぐに体を引き起こす。その間わずか数秒。

浴槽を出てから脱衣所へ引き返し、体をふくためにタオルを貸してくれと英語で言うのに、さっぱり通じない。タオルだタオルだと何度も催促していると、だれかが英語のできる男を呼びに行ったらしい。すぐに若い別な男が入って来て、なめらかな英語で答えた。

「タオルは必要ありません。体をふいてはいけないのです。そのまま服を着て下

●男子用水浴所内部

さい。すぐに乾きます」

おどろいた話だ。この年齢になるまで他人の面前で強制的に全裸にさせられたのは二十歳の徴兵検査のときと、この聖泉につかったときだけで、しかも全身濡れネズミで下着や服を着せられるとは前代未聞である。

だが、ここで働くフランス人の男たちはみな親切で温かい人柄を感じさせる。鈴鹿女史の話によると、一年単位で奉仕的に働きに来る信徒なのだという。聖泉に入るときに下着をつけたり、上がってから体をふいたりしては効果がないらしい。また、ここの水はどんなにごっても自然に殺菌される不思議な水なのだ。濡れた体は奇妙にもすぐ乾いた。

水浴所を出ると、入口わきのベンチに遠藤君（GAP会員・千葉県）やその他の仲間が七、八人、すわって順番を待っている。

「いやもう、おどろいた水浴だね」などと語りかけてから、今度は洞窟の方へ歩いて行く。これこそ聖域の中心部で、水浴所の左側の山麓にあり、見ると大群集が洞窟前に集まっている。祈りをささげては去って行くのだが、人混みの中にいては容易に進まない。そこで最左端へ移動して、柵に沿ってにじり寄るように前進する。長時間ゆっくりと進んでから、やっと洞窟前へ出た。大きなローソクが束のようになって燃やされるなかを人々は一列になって洞窟の入口を一巡し、そのときお祈りをしたり洞窟の岩壁に手でふれたりする。なかには壁にキスをする人もある。入口の右上方の岩の間には白い大理石のマリア像が安置してある。事件後にベルナデットから直接に詳細を聞いてリヨン美術学校のファビシ教授が彫刻した作品だ。だがこれを見たベルナデットは、「立派に出来ているけれども、私が見たマリアさまの姿とはくらべものにならない」と評したという。

●マッサビエル洞窟前で祈る人々。手前の列は奉仕員。

すべては写真で見て知っていたとおりの光景だ。違うのは、今日ここに無信仰な日本人の一団がカメラをぶらさげてやって来たというぐらいのものだろう。

私はすぐに洞窟へ接近しないで、少し空地になっている祭壇の前に出て、川上氏らと共にここから四方八方を撮りまくった。かなり傍若無人な振舞だったかもしれないが、遠慮していたのでは良い写真にならない。しかし祈禱する聖職者や信者たちは何も言わず、非難がましい眼付きを示すこともなしに黙認している。信仰という裏付があれば人間はこうまで寛大になるのか、それとも私たちを日本人とみて、遠い東洋の先進国（？）の高級カメラで撮影されることを喜んでいるのだろうか。

しばらく撮影したあと私は行列に加わって、洞窟へ近寄った。百二十年間、無数の人の手にさわられた黒い岩肌はなめらかになっており、天然の岩壁には見えない。奥をのぞいてみると、七、八メートルはあるだろうと思ったのに、意外にも浅く見える。大きな岩石で封鎖してあるのだろうか。だが、ここでその昔、ベルナデットが聖母マリアの幻を見てひざまずき、会話を交わしたのだと思うと万感胸に迫ってくる。また七十五年前、マ

●聖泉の水飲み場

●マッサビエル洞窟前で祈るベルナデット。
事件後に撮影された貴重な写真。（現地資料）

リー・フェランに一大奇跡が生じたのをカレル博士が目撃したのもこの場所だ。カレルはどのあたりに立っていたのだろう。ベルナデットがひざまずいたのはどの位置か。

さまざまの推理や憶測が心中を流れるうちに、私はいつしか人の波に押されて洞窟から離れて行った。

少し行くと山麓に沿って聖泉の水飲み場がある。石壁の上方に水道の蛇口が横に数ヵ所設置してあり、詮をひねると冷水が出てくる。ここは押すな押すなの大盛況で、大勢の人が水筒やビンに水をつめている。マリア像を形どったプラスチックのビンを土産物店で売っているのでそれを持っている人も多い。

私は日本から持参したプラスチックの五合入りビンをバッグから取り出して、水をいっぱいに入れてからラッパ飲みした。天然の聖泉水はすごく美味だ。冷水が五臓六腑にしみわたって心身ともに浄化されるような思いがする。

少年時代から憧れていたこのルールドへついに来た。多年の夢と願望が実現したのだ！　この聖水で私の体に奇跡は生じなくても、聖地参拝の願いがかなえられたことが奇跡ではないか！

言い知れぬ感動と歓喜で全身が爆発しそうになり、天を仰いで大声で叫びたくなる。

「やったどォ！」

人々は水を求めて殺到する。私は飲みほしたビンを洗い、また水をいっぱいにつめて、しっかりとふたをした。この聖水は佐賀県在住の古くからのGAP会員で、眼病をわずらって盲目になられた平野三郎氏に贈るために採取したのである。

水飲み場を離れてから私は大聖堂前の大広場へ出た。聖体行列が始まるというので、ここにしばらくいて群集を撮影する。車椅子に乗せられた重病人が次々とやって来る。

マンジャパン博士と会見

人間の強さと弱さとが交錯するこの宗教的雰囲気は、想像していたほど熱狂的なものではなく、自己陶酔、自己催眠的なものでもない。この日もおそらく何人かの病人に奇跡的な治癒現象が発生したのだろうが、奇跡の起こる理由についてはいまだに謎である。あとで八名ばかりの仲間と共にルールド医務局の局長マンジャパン博士を訪れて、一時間ばかり質疑応答を行なったが、博士の回答も、結局は理由不明だということだった。要するに自覚症状の消滅した完全な健康体を調査してもどうしようもないというのだ。一行のなかには沖縄から参加された医師の高江洲氏もおられ、専門的な質問を試みておられたが、要領を得ずじまいだった。やはり医学では解決がつかないのだ。だからルールドの事件は世界のミステリーのトップクラスとして浮上してくるのである。

参詣時の熱烈な自己催眠作用または異常な精神力が治癒効果をもたらすのでは

●マンジャパン博士（右より4人目）と共に

ないかと巷間でよく言われるが、これは妥当ではない。なぜなら二、三歳の幼児でさえもルールドで奇跡が発生するからである。日本の浅井工学博士は聖水が多量のゲルマニウムを含んでいるからだという説を発表されて話題となったが、しかしマリー・フェランのごとく聖泉に浴さないで瀕死の重病が瞬時にして全快した例もある。マンジャパン博士によると、これまでに医学上で精密検査をした結果、完全な奇跡的治癒と認められた例が六十四件あるという。これはかなり控え目な数で、実際には全治しながらも医務局へ届け出なかったり医師の確認をとらなかったりした例が無数にあるらしい。

博士は温厚篤実な印象を与える立派な方で、私たちの質問にこころよく丁寧に答えた上、資料も下さって、最後は一人一人に握手をされた。

私が頂いた六十四名の奇跡発生者名簿は帰国後に眼を通したが、マリー・フェラン（本名はマリー・ベイユ）の名は見当たらなかった。おそらく若き日のカレル博士が社会的地位を失うことを恐れて記録から抹消することを望んだのだろう。そういえば博士の手記『ルールドへの旅』の主人公の名はカレルという綴りを逆読みにしてルラックとなっている。よほど用心深く書いたものらしい。

いずれにせよ、無学な一少女の体験が百二十年間にわたって、こうまで多数の人を引き寄せるからには、それなりの原因があるはずで、いい加減な事で一大聖地と化すわけはない。単なる宗教とか信仰とかの次元を超えた〝何か〟が存在するのではないかと、あとで斉藤守弘氏と語り合った。

これについてはUFO問題と関連する私なりの推論があるのだが、長くなるので省略しよう。

●広場における聖体行列

ルールド市内の旧跡めぐり

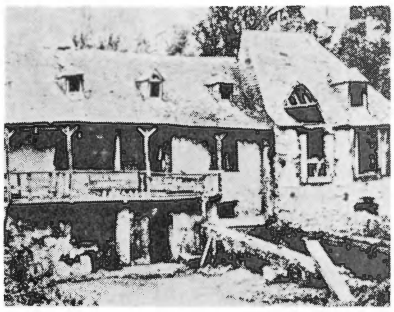
十二時にホテルへ帰り、全員集合してから坂道を登り、レストラン『アレクサンドリア』で昼食をとる。ここでは聖泉の水浴のことでひとしきり話の花が咲いた。高橋和美さん（GAP会員・埼玉県川口市）に「あなたがた女性も全裸にさせられたの？」と尋ねると、恥ずかしそうに笑ってうなずく。男女とも全く同じ方法で水浴させるらしい。

昼食をすませて徒歩でホテルへ帰り、暫時休憩の後、二時二十分に全員バスで市内のベルナデット関係の旧跡めぐりに出かける。市内は交通規制がないので人と車でごった返し、容易に前進しない。

最初に着いたのはベルナデットが生まれたボリの水車小屋跡である。これは一九〇〇年頃に撮影された写真とは似ても似つかぬほど外観が変化しており、あたりは民家が密集した地区になっている。中へ入ると当時使用された古びた木製の道具類がある。その他さまざまの遺品類があるけれども、一階の右半分が土産物店になっているのは意外だ。いかにも学術の分野から離れた信仰の世界の史跡らしく感じられる。二階の部屋にはベルナデットが誕生したという粗末な木製のベッドがそのまま残っている。

次の見学場所は、両親がボリを離れて移住したラカードの水車小屋跡である。ここも原型をとどめぬほどに外観は改造されているが、階下には昔使用した木製の粉ひき道具があり、二階へ上がると、壁や棚などにぎっしりと家族親せきの写真や遺品類が展示してある。印象に残ったのはベルナデットが自作したというマッサビエル洞窟の小さな模型で、ここにも木製の粗末なベッドが残っており、その上方の壁には聖女が洞窟前で祈っている大きな油絵が掲げてある。このベッド上で彼女は何を考えながら眠りについたのだろう。ボリといいラカードといい、いったいに展示品は雑然と並べてあるが、むしろこのほうが親しみを感じる。博物館の冷たいガラスケースに入れられるとピンとこないだろう。

続いて私たちはまたバスに乗り、プチフォセ通りという裏道に面した牢獄跡へ行く。ここの一室を借りてスビルー一家



●ベルナデットが生まれたボリの水車場。現在はひどく変わっている（現地資料）

●両親が住んだラカードの水車小屋跡。

が住んだ頃が極貧時代で、わずか四・四メートル四方の部屋に両親、ベルナデット、トアネット、ジャンマリー、ジュスタンの六人が暮らした。末弟のジュスタンなどは教会のローソクの垂れをひろって食べたというが、両親は他人の恵みをいさぎよしとしない清廉潔白な人だったらしい。ベルナデットが最初にマッサビエル洞窟で貴婦人の幻とコンタクトしたのは、この牢獄跡に住んでいた頃のことだ。

室内にはこれという遺品はなく、隅に暖炉の跡があり、上手に台がおいてあるぐらいで、ガランとしている。

鈴鹿女史がどこからか日本語の説明文を持って来て、これを皆さんのために大きな声で朗読せよと言う。こういう物が準備してあるからには、日本人も訪れることがあるのかとあとで女史に聞くと、

●牢獄跡の部屋で朗読する筆者

ときたまカトリック信徒のグループが来ることがあるという。そうすると非信徒のグループはやはり私たちが最初だろう。

ここで解説文を読み上げるのは光栄と思い、私は力をこめて朗読した。最後に「貧しき者は幸いである」の一句があったが、これは「心の貧しき者は（謙虚な人はの意）」の省略であろうと考えて、そのことを一言つけ加えようとしたが、くだらぬことはやめておけと思い、言わぬことにした。また最後にアドリブとして「本日、ここに私どもは聖女ベルナデットの栄光を讃えますとともに、皆様方にも祝福のあらんことをお祈りする次第であります。エイメン」と唱えて十字を切ろうとしたが、なんだか芝居じみているので中止した。女史はおそらくそれを

●バルトレスの羊小屋（現地資料）

望んだのだろう。残念そうな顔をしている。

廊下には遺品類や、聖女が書いた自筆の原稿などが並べてある。

次の見学地はバルトレスにある乳母の家である。ルールドから三キロ離れた当時の寒村バルトレスにマリー・アラバンという婦人がおり、母親が次女の出産のために手がまわらなくなったあいだ、乳児期のベルナデットは一時この母親の友人宅で養われたが、後の十三歳の頃、またこのアラバン家で羊の番をしながら、カトリックの公教要理を夫妻から教わった。いわば、なつかしい第二のわが家なのだ。

中へ入ると、奥にベッドや椅子等、当時のものがそのまま残してあり、窓ぎわの壁には大きなフライパンやナベなどがつり下げてある。

付近には百二十年前の頃の古い民家がまだ数軒あり、石やレンガで作るから残るのだと女史が話す。

ここから一同は急坂を登って山の上にある羊小屋へ向かった。かなりな傾斜で、これは全く昔のままの狭いでこぼこ道である。舗装はされていない。この山道を毎日羊三十数頭と犬一匹をつれた聖女が登り降りしたのだ。好天の日には泰西名画のような美しい光景が展開したことだろう。

約三百メートル登ると、高台に羊小屋があった。これも昔のままで、石と土とで練り固めた建物だ。現在は使用されておらず、中へ入るとマリア像などがおいてある。むかしこの羊小屋は、にわか雨の場合の退避所として使われたものである。

この頃から小雨が降り出したので、急いで全員で記念写真を撮影する。いったいに私が出かける旅行では雨にあわないのが普通だが、この雨は遠い日本から来た私たちを歓迎する聖女の嬉し涙なのだろう、と解釈した。

山を降りてから地元の教区教会へ立ち寄る。ここには乳母一家族の墓がある。優しかったマリー・アラバン夫妻は逝った。当時を知るすべての人々はみんなこの世を去ってしまった。どこへ行ったのだろう——。

無言で墓を見つめる私に感傷のかげりはない。ただ人の世の不可思議なカルマを思うだけだ。教会からミサの合唱が流れてくる——。

●ルールドの町

この聖ヨハネ教会はベルナデットが通った所で、神父さんが彼女の習字練習をした筆跡の残った紙を持ち出して見せてくれる。

丘を降りてから一同はふたたびバスに乗り、五時半にホテルへ帰って、ここからまた七時五十分頃そろって昼間と同じレストランへ行き、フランス料理の魚の夕食をとったあと、そこで解散した。希望者のみ聖域で行なわれる夜のローソク行列を見に行こうということになり、成瀬氏夫妻と共に出かけたが、現地へ行ってみると、すでに終了していた。撮影には絶好の対象だったのに、全く残念なことをした。

フリットクロフト夫妻に会う

翌十七日朝八時三十三分発の急行列車でパリに向かってルールドを出発する。

ルールドでは大量の資料を入手したのだが、重くて持ち歩くわけにはゆかぬので、鈴鹿女史に託して日本宛に発送してもらうことにした。

この日は空がよく晴れて、南フランスの美しい山間部や平野などを列車の窓から眺めながら旅するのは実に快適であった。広漠たるブドー畑のあいだに、お伽の国に出てくるような色とりどりの美しい家が点在する。フランスはワインの名産国だから仕出し屋から出たトリ肉などの昼弁当にもワインの小ビンがついている。車内の各席は談論風発、小学校の修学旅行のような愉快な雰囲気に満ちている。

●パリへ帰る急行列車内

列車がパリに着いたのは予定よりもかなり遅れて、バスでホテルへたどり着いたのは五時すぎだった。実はこの日、ベルギーGAPのリーダーたるメイ・フリットクロフト夫人が、私のホテル『ノルマンディー』に来ることになっており、当初ホテルへ三時頃帰着の予定だったため、その旨を連絡しておいたのだが、私たちの帰りが遅れたので、かなり待たせたのではないかと気がかりだった。

しかしロビーを見渡すのに、それらしい婦人は見当たらない。おかしいなと思っているうちに、ボーイがやって来てホテル内のバーでムシュー・クボタを待っているお客さんがいると言う。入口の方へ近づくと、中から意外にも四人の男女が出てきた。英語で挨拶すると、初老の感じのするメイが一人ずつ紹介する。五十歳代のやせた長身の紳士がご主人のキース・フリットクロフト氏、三十ぐらいの眼鏡をかけた小肥りの男が息子のフィリップさん、もう一人の三十歳なかばに見える女性はGAP活動の助手だという。しかも彼らはアントワープから四百キロの道を車で来たと言い、明日仕事があるために今日は帰らねばならぬので、あまり時間がないのだとも言う。メイ一人だけで来て今夜はパリに一泊するのだろうと予想していた私は、十五分ほど待ってくれと頼んでアワをくって自室へ入り、超特急で服を着換えて身仕度をし、土産物、カメラ道具一式、テープレコーダー等をととのえてロビーへ降りた。近くのレストランへ行こうと誘ったところ、ゆっくりしていられないと言う。そこでホテルの奥の小会議室を借りることにして、ここへ旅行参加者のうちGAP会員十数名の方だけに集まってもらって紹介することにした。

キース・フリットクロフト氏はオーストラリア出身で、むかしからアダムスキーの支持活動を続けてきた人である。したがって英語を母国語とするから会談はすべて英語で行なおうと当初予定していたが、ルールド旅行にフランス語の通訳として同行されたパリ在住の春田流美さんが、日本語よりもむしろフランス語を母国語とする人であることを知って計画を変更し、このお嬢さんに通訳をお願いすることにした。なぜならメイはフランス語を母国語とし、英語は不充分であることをかねてから文通により知っていたからだ。しかも彼女が今日の主役なのである。

これはうまくいった。メイがもどかしそうに英語で切り出すのを制して、今日はすべてフランス語で話してくれと言うと、喜んで立板に水を流すようにしゃべり始めた。

しかしその前に、整列したGAP会員の皆さん方に四名を紹介し、全員で拠出した六百五十フランに私が二百フランを加えて、計八百五十フランを彼らの活動費の一端にと献金した。メイは驚いたような顔をしたが、これは日本人の習慣なのだと言うと、ひどく感謝した。八ミリカメラを携行しているGAP会員の間嶋氏（岐阜市）が、明るい内に撮影したいので全員、ホテルの玄関前に出てくれないかと言うので、いったん外へ出て、ここでムービーやスティルカメラなどでひとしきり撮影する。

ふたたびホテルの会議室へ引き返し、今度はベルギー側四名、こちらは二人の計六名だけで話し合う。

大きなテーブルをへだてて向かい側に左から助手の女性、メイ、キース、フィリップという順に並び、こちらは左に春田嬢、その右隣りに私がすわる。

私は日本から持参したお土産を進呈した。フリットクロフト氏にはカシオの極薄型計算器、夫人には会津塗りのオルゴールである。包みを開いたメイはその美しさに驚嘆の声を放ったが、ふたをあけて『さくら、さくら』のメロディーが流れるや、急に涙を浮かべて声をつまらせた。なんという美しい曲だと、とぎれとぎれにつぶやく。

「これはサクラの花を歌った伝統的な日

●ホテル「ノルマンディー」前にて。左より池田，合田，大内，相馬，菊地，フリットクロクト，遠藤，筆者，寺井，フリットクロフト夫人，大坪，キャルウォッツ，大久保，橋本，鶴田，野口，フィリップ，馬嶋，高橋の各氏。

本の民謡です」

私が説明すると、実にすばらしい、なんとお礼を述べてよいかわかりませんと夫人は繰り返し言う。

このあたりから一同の会話は英語からフランス語に切りかわった。私はフランス語は英語ほどしゃべれぬので日本語で話し、それを春田嬢がかたっぱしからフランス語に翻訳する。

彼らはまずカバンの中から次々と資料を出して見せた。写真が多く、アダムスキーの顔写真のなかには私が所有しているのと同じものが何点かあるが、初見のものもある。

「私たちが今日ここであなたに会うことはカリフォルニアのGAP本部に知らせてありますので、十月十二日にアメリカへ行きますから、そのとき、ここで録音したテープを持参して、会見の模様を知らせようというわけで、喜んでここへ来ました」とメイが説明する。

フリットクロフト氏がフィリップと一緒にテープレコーダーを持ち出しながら「日本のテープレコーダーはすごく優秀です」と言うので、よく見ると某社製の少し古い型のものだった。

聞くと、ベルギーにはフランス語圏とフラマン語（注＝フランドル地方のオランダ語の方言）圏があり、一年前にもフラマンにもGAP活動が開始されたという。

次々に種々の資料を出して見せたり、くれたりする。そのなかに、オランダで出来た円盤型の科学技術館の写真を見せる。これは昨年ステックリング氏から聞いてすでに知っていた。フィリップ社が建てた、宇宙の問題をテーマにした科学技術の粋を集めたものだという。オランダのユリアナ女王のお声がかりで作られたらしい。その他にもステックリング夫妻がベルギーやオランダを訪れたときの写真や、メイ夫妻の家などの写真もある。

また、かねてからメイが私に知らせていた「Someone is on the moon」という本を読んだかと彼女が聞くので、いまニューヨークへ注文しているが、実は最近日本でも翻訳書が出たと言うと、あの本はアメリカで発禁になり、イギリスでもフランスでも入手できないのだとメイは意外なことを洩らした。これは重大な情報である。発禁になった理由としては、アポロ計画により月面に〝人間〟や基地が存在する事実が判明したことをその本がすっぱ抜いたからだ。そうするとこの内容を知るには日本語版しか手がかりはないことになる（「それでも月に何かがいる」啓学出版発行）。私は旅行出発前に遠藤君から一冊贈られて、ざっと眼を通していた。アダムスキーが体験記で述べた月面の状況を立証する好著である。

私はメイに質問した。

「あなたがアダムスキーと一緒にバチカン宮殿（注＝正式にはサン・ピエトロ寺院）へ行ったときのことを話して下さいませんか」

「そうですね。あれはかなり以前のことですが、まだよく憶えています。そのとき同行したのは、バーゼルから来たルウ

・チンスタークと私の二人だけでした。サン・ピエトロ寺院の正面階段の所まで行ったとき、アダムスキーが『ちょっと中へ入って来るから一時間ほどここで待っていてくれ』と言い残して、左側のスイス人衛兵のいる所を通って行くものですから、私はびっくりして見ていました。なぜならアダムスキーは教会へ決して出入りしない人だったからです。

見ていると、衛兵のいる門のずっと奥に入口があり、そこに男が立っていて手招きするので、アダムスキーはその方へ歩いて行きました（注＝この男がスペース・ブラザー＜進化した他の惑星から来た友好的な人をこのように呼ぶ＞だったといわれている）。

あとに残った私たち二人は手持ちぶさたなので、あたりをながめていると、ルウが『何か飲み物を飲みに行かない？』と誘うんです。それで私はふらふらとついて行って、喫茶店でゆっくりすごしたあと、元の位置へ帰りましたら、アダムスキーが十二時に出て来て、『ここで待っておれと言ったのに、どうして私の言葉に従わないのだ』と言います。この言葉に驚きましたが、このときは心から後悔しました」

むかしの写真に見られる往年の若さはすでに消えうせて、シワのふえたメイの顔にはすでに老婦人のきざしさえ見られる。しかし相当な早口で、しゃべり出したらとどまるところを知らないという話しぶりだ。なまじっかな通訳ならネを上げるところだろうが、そこは中学・高校の課程をパリで学び、現在パリ大学の理数科に籍をおく春田嬢のこと。通訳は実にあざやかである。

メイは続ける。

「そのあと三人でホテルへ帰ってレストランにいたとき、法王庁の使者が来て、アダムスキーに黄金のメダルを渡しました」

メダルはアダムスキーが寺院内から持って出たものではないらしい。しかも、彼はルウよりもメイのほうを信頼していたらしいことが、その口ぶりから察せられる。果たせるかなルウ・チンスタークは後年アダムスキーの体験の一部分に対して批判的になったのである。

メイはもとモルレ氏の夫人であった。氏が逝去されてから五歳下のフリットクロフト氏と再婚したということは、以前カリフォルニアのビスタへ行ったときに聞いた。だが息子さんのフイリップはまだモルレ姓を名乗っている。

フリットクロフト氏は五十四歳で、建築関係の設計の仕事をしているという。

フランス語は苦手なようで、しきりに英語で話したい様子を示すが、通訳嬢に遠慮してか、抑制しているらしい。

私は尋ねた。

「私自身はかつてアダムスキーに会ったことはありませんが、GAP活動を十七年間続けてきました。それで――」

すかさずメイ夫人が合の手を入れる。

「だから私たちはあなたを尊敬しているのです」

「それで、アダムスキーに会ったことのあるあなた方に、彼の人柄などについて聞きたいんです」

「そうですね」とメイは一息いれて語り続けた。

すばらしい人物だった アダムスキー

「実にすばらしい方でした。心から尊敬しています。一九六三年に十五日間、私の家に滞在されましたので、息子も主人（モルレ氏）もお会いしています。忍耐力は抜群で優しい方であり、またテレパシーの能力の強い方でした。

一例をお話しますと、アダムスキーはすごく話し好きな人で、夜が更けてもみんなのために、いつまでも話して下さいました。

あるとき、アダムスキーが台所に行かれました。私たちは居間にいたのですがアダムスキーは台所から出て来て私たちの顔を見るんです。すると私たちが質問したいと思ったことを彼が感知して、いきなり答えてくれたのです。それで一同はあっけにとられてしまいました。

また彼は非常に忍耐強くて、たとえば当時私の息子はルクセンの学生で、大勢の学生が質問したのですが、アダムスキーは優しく忍耐強く、ひとつひとつ答えてくれました。

また、会合のときなど、変な人がいて妨害の意図で来る人もいましたが、アダムスキーの話を聞いているうちに、彼の話に魅せられてゆく傾向がありました。

ですから、本当にすばらしい方で、あらゆる質問に明確に答えて下さいました。全く回答不可能ということはないんです。しかも相手の知識の次元に合わせて答えるという豊かな人間性がありました。

また、こんなこともありました。あるとき気になるひとつの建物があって、それに一七九二年と表示してあったんです。そのときアダムスキーにむかって、『あなたはそのとき、そこに居ましたか？』と尋ねたんです。すると彼は過去世にその建物に居ましたと答えました」

メイは早口で話し続ける。

私は次の質問を出してみた。

「あなたはスペース・ブラザーズまたはスペース・シスターズとコンタクトしたことがありますか？」（次号完結）

（7頁よりつづく）

は磁気ボルテックスもひき起こします。

いつそれが発生するか、地下から起こる磁気ボルテックスと一致して活動するかどうかを察知するのは、現在の地球人の知識外のことのようです。

しかし少なくともこのことは魔の地帯が多くの場合安全であり、ごくまれな機会に船や飛行機がその地域で危険である理由を明確にしています。

人間がもっと磁気とその影響について理解するならば、こうした危険な状態を克服できるでしょう。

UFOすなわち宇宙船は電磁エネルギーで推進し、フォースフィールドによって外部の干渉や摩擦を防いでいますし、自然の条件で傷つけられることもありません。これは宇宙船が自然の力に対抗しようとするよりもむしろそれに従って作動しているからです。

久保田八郎訳

地方支部の総会、活発化！

■岐阜支部総会

五月二十一日、岐阜市商工会議所。午前九時より午後四時まで。出席者約三十名。

久保田主宰者は五月二十一日に開催された岐阜支部大会の講演のために、五月二十日午後二時頃岐阜市に来られ、新緑の金華山ドライブコースや岐阜公園、岐阜城を私と一緒に散策され、快晴の濃尾平野を一望出来る金華山山頂のレストランでアユ料理の美味を満喫された後、宿舎のワシントンホテルで夕方六時頃大阪支部長の片氏や京都の山田氏、愛知県の大内嬢らと合流後に、近くのレストランヤマトにて楽しい雰囲気の内に夕食会に参加され、相互の友好を深め、有意義な一刻をすごした。その後に福知山支部長の仲間氏が午後八時三十分頃に一同の会食に加わられ、GAPミニ総会でもあるかの感を深めた。

翌日二十一日はいよいよ岐阜支部大会である。不思議と代表がいらっしゃる日は必ず天気が良く、一つのジンクスとなっているらしい。会場の岐阜市商工会議所では、朝早くから会員諸氏が多数つめかけられ、ほぼ満員の盛況である。会場にはG・アダムスキー師のUFO写真類が貼られ、またアダムスキー市やC・A・ハニー氏の記事のパンフレット多種類が一部実費20円で配付された。

午前中はまず私の挨拶に引き続き、片氏、主宰者が挨拶された後、中米宇宙考古学遺跡の旅という事で、マヤ遺跡、メキシコのマリア女史家訪問やGAP本部など、主宰者の解説でスライドが映写され、バックミュージックにはメキシコの民族音楽が流されて、映像を見ているだけでメキシコを旅している感じがした。古代宇宙人が残した数少ない遺跡の旅でもあり、G・アダムスキー師が探検されるはずだった地でもあって、資金面で行けなかった場所だけに、主宰者も感無量であった事と思われる。

午後からはいよいよ片氏の講演が1時間行なわれ、内容は実践宇宙哲学といった所で深遠なものが感じられた。会場から惜しみない拍手があった。締括りは主宰者の総花的深遠な内容の講演があり、会員諸氏も一言一句聞き漏らすまいという態度が目に付いた。最後に主宰者による質疑応答が約1時間あり、午後4時に大成功裡に岐阜支部大会が閉会された。この大会が大成功であったのは、会員諸氏や久保田主宰者、片氏の厚き御協力のたまものであったことを特に明記しておきたい。大変有難うございました。感謝致します。

（松尾和也記）

■大阪支部総会

六月十一日。吹田市民会館。一時より五時まで。出席者約四十名。

当日はむし暑い日だったが、約四十名の会員の方々が出席され、きわめて真剣な雰囲気のみなぎるなかを主宰者のア氏哲学を主体にした講演が行なわれ、そのあと『中米宇宙考古学遺跡の旅』のスライドも映写された。講演では人生の幸福について明確な具体例が示され、感銘を深めたが、スペース・プログラムの意義に関しては重要な解説があり、これは我々の今後の指針として特に銘記すべき内容であった。

スライドはすばらしいものであった。アメリカGAP本部内での記念撮影、メキシコのマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の大邸宅で撮影されたアダムスキーの描いたイエスの肖像画の大画面は圧倒的な感動を呼び起こした。ア氏が遠い過去を透視して大師の姿を見たといういわくつきのこの肖像は、スペース・プログラムの遂行上貴重な資料になるものであろう。

遠路をいとわずに参集された会員の方々と久保田主宰者に衷心より感謝する次第である。来年度も盛大な大阪支部総会を開催することを約したい。

（片　京記）

■静岡支部発足総会

八月六日。静岡県婦人会館
一時より四時半。出席者約三十名。

真夏の太陽の照りつける八月六日GAP静岡支部が誕生しました。当日は県内の熱心な会員の方々をはじめ、埼玉、京都、愛知からも非常に熱心な会員の方々のご参加もあり、総勢で約三十名の発足総会となりました。

六四号のニューズレターに静岡支部設立準備中の記事が掲載されてから二カ月間での発足でした。この間人数把握のためのハガキの印刷発送、会場探し、案内状の印刷発送とあわただしい毎日でしたが会員の方々から激励のおハガキをいただき元気づけられました。

会は久保田先生の挨拶が始まり、「宇宙哲学の勉強の場が当地静岡に出来たことは大変喜ばしいことで、これを末永く続けて下さい」と我々を励まされました。次に私の体験談を少し話した後、先生の「アダムスキー哲学と人生の幸福」という題の講演が始まり、GAPの今日までの経過、テレパシー、透視、イメージを描いて物事を実現させる方法、この世の中をどのようにして生き貫くか等興味ある話ばかりで全員真剣に聞き入っていました。休憩の後全員の記念撮影、質疑応答と進み多数の質問が出され貴重な話もあり全員が有意義な一日を過ごし参加してよかったという気持に満ちて四時半に終了しました。

総会の後、希望者による夕食会が開催され、この席でも質問発表といろいろ話が出され、特に昨年のアメリカ、メキシコ旅行でGAP本部のあるビスタからロサンゼルスへ帰る途中のバスの中から目撃された不思議な雲（〇の中にSJの文字）は実は円盤が作ったのだという、愛知から参加された大久保氏の詳しい目撃報告があり、約一年後にして謎の雲の正体が解明されました（SJの文字は何を意味するかはまだ謎です）。そして夕食会も六時半に終わり静岡支部発足総会は大成功でした。

これも早朝よりご出席下さった先生をはじめ遠路はるばる駆けつけて下さった方々や県内の方々及び当日都合で参加出来なかった方々の影ながらの応援など皆様方のご熱意心より感謝しております。どうもありがとうございました。

（野口敏治記）

× × ×

●早稲田大学UFO研

五月二十三日。都内両国のパールホテル。出席者十二名。

早大UFO研主催の『久保田八郎の話を聞く会』がパールホテルの小室で開かれた。出席者は十二名と少数であったが大部分はGAP会員で、おそろしく真剣な態度に編者は胸を打たれた。若者のシラケ時代といわれる現代でも全く次元の異なるすばらしい青年男女が都内に在住し、はるかに高度な宇宙的思索にふける実態をまのあたりにして「まだ日本は大丈夫だ」の感を強くした次第である。UFO研会長の子安克巳氏、司会の荒川雅夫氏、出席者各位に深甚の謝意を表したい。うち三名は女性であった。（編者）

先日二十三日の先生をお迎えしての談話会、誠にありがとうございました。質疑応答についても質的に高度なものでしたが、その前に久保田先生が自己紹介を含めて話された色々な事は、その大部分が普段なかなか聴くことのできない貴重な内容でしたので、我々の間で大変好評でした。特に、初めての小安さんは先生の御人柄と話された内容について感激していた様子です（以下、当日の談話内容の要点が記録されているも省略）。

（荒川雅夫記）

●ほびっと村で講演

去る三月十七日夜七時より、都内西荻窪駅前の「ほびっと村学校（若い人達の各種研修の場）」でアダムスキー問題について三時間の講演を行なった。学校の教室ほどのゴザ敷きの会場につめかけた百名以上の若い男女で熱気の溢れる中をアダムスキー哲学と人生問題について熱弁をふるったが、質疑応答が活発に展開して規定の時間はすぐに過ぎた。（編者）

会員の声

投稿歓迎。「会員の声」宛と記し適当な用紙を使用。タテ書き。字数自由、匿名可。但し住所本名明記。

実在の人を透視

滋賀県　石崎広次

五月二十一日の岐阜市での御講演をありがとうございました。つきましては少々お伺いしたいことがありますので、よろしくお願いします。

岐阜総会でのお話のなかで、GAPの会員で金星人の生まれ変わりがいるといわれましたが、その時にその人の姿と名前が突然目の前に現われました。あまりにもはっきりと見えたので思わずビックリしました。その人はQさんです。本人を見たことはありませんが、ニューズレターの写真で見て知っております。もっとも私の受けた印象が間違っていなければの話です。質問の時間にこのことを確認しようかと思いましたがその人に迷惑がかかるといけないと思い、手紙に致しました。

それから私はよく日本沈没の夢を見ますが、その中で、ある時、上空から一機のUFOが降りてきて、宇宙人が二人現われました。その顔は南米系のように見えましたが表情は友好的でした。そこで私は日本は沈没するのか、その時期はいつ頃かと尋ねたところ、今はまだ言えないという返事でした。その時、私と一緒にいた人達は催眠術のようなものをかけられていたらしく、目を半分閉じて無意識状態でした。夢なので細かいことまでははっきりとわかりません。そしてまたある時はオーラも見ました。それはピンクと薄い緑でしたが、今までに見たこともない非常に美しい輝きでした。夢とはいえ強烈な印象でしたので、その日は一日中別世界にいるような感じでした（Q氏を透視したときは本人の右横に一緒に文字が赤みがかった色で浮かび、名前が耳に聞こえるようであったとの由〈編者〉）。

スペース・ブラザーが注目？

秋田県　M・S

数年前にGAPに加えて頂きましてから今日まで、ほとんど毎日といってよい位にUFOを目撃しつづけていますが、その最初の時、夢に、前後関係なく突然一機の円盤が現われ、一瞬強烈に光り輝き、そしてそれだけで消えてしまったのですが、まるでそれが合図であったかのごとく、夜空にUFOが現われるようになりました。

千葉県におりました時には、多い時で二十回前後も連続して赤い楕円形の光が私の目の前の夜空を行き交います。一度に四、五回現われるのが普通ですが、それが毎日なものですからUFOを目撃することが私にとっては日常的なことになってしまいまして記録をとることもなく人に話すこともなく、ひとりでながめては、ひとりで確認しておりました。

千葉県を離れて、都内のアパートに移ってからも事情は同じで私の部屋の前の夜空を、ほとんど毎日平均三回位まるで定期便のように同じコースを同じ形の光体が通過します。時々二機のUFOが行き違ったり、光り方を変えたりして飛行機でないことは確実です。しかも今度は、一機の円盤が、低空の一地点に静止し私の方に光を放ち始め、それが次第に強くなり、私はアパートの二階の自分の部屋にいるのですが、まるで舞台上で上方からライトで照らされているような明るい光で、ロマンチックでもあり、なかなか快い気分にさせてくれます。

最初は驚きましたが、二度三度となるうちに慣れまして、落ち着いて確認することができるようになりました。秋田に移ってからは、まだ一度だけですが、いつも私が目撃するのと同じ光り方をするUFOです。

なぜこれほど頻繁に現われるのか不思議でしたが、先生がGAPの例会の場で、とても象徴的な黒い服を着た女性が石壁をかけ登っていくという夢の話をなされた時、合点がいったように思われました。というのは、あの日、GAPへ出席する数日前になりまして、「今度の例会には絶対に黒い服を着ていかなければならない」という強い感じをもつようになりましたが、その時、適当な服がなかったのでわざわざ買いに出ました所が、最初の一軒目の店に私の好みに合ったデザインの黒いブラウスがあり、しかもそれが半値以下に安いのです。そしてそれを着てまいりましたら、先生が夢の話をなされその内容が、あまりにも大切で、重要なことでありますので、その事とこの私が一体どのように関係があるのか、私なりに考えてみました。

「生命の科学」というすばらしい本を拝読する好機を得、会員に加えて頂きまして、その最初の例会に出席しました時、前に立たれて講演なさっておられる久保田先生のお姿を拝見しまして、「父に似ている」ということと、「私のくるべき所に来た」という強い第一印象を受けました。

父の影響を受けましてか、私は小学生の頃には、出家して仏門に入ろうとひそかに考えておりました。子供心のあこがれもございますが、子供なりに、仏門に入れば絶対的な境地（私にとってのそれは、宇宙そのものになること）に立てると信じておりました。こういう傾向は、私の前生と深い関係があるのでしょうね。

「生命の科学」を拝読します前に私は新約聖書を愛読しておりましたが、意味不明な点が多く、比喩が難解でしたが、「生命の科学」の中にその解答がすべて述べられてあるのに驚きますと同時に、今まで迷いの霧の中に迷っていた私の前に、強烈な光がさし込んで来たような喜びを受けました。

私には解りませんが、今年の春、ふと外出したくなり新宿に出まして歌舞伎町の交差点を渡っていますとある男性が私の前に現われ、何気なくその後姿を見ていると、「この人は宇宙人だ！」という強烈な印象が私の深い所からわき起こってきました。私は特にそのような事など、全く考えていませんでしたので、突然のその印象に我ながら驚いてしまったくらいですが、しかし疑いようのない確実な印象でしたので、それからその男性を注意していました所、その人は私の後に回って、十m位間隔を置いて、ずっと私の後をついてくるのです。私が立ち止まるとその人も止まり、私の様子をうかがっているのです。そして、とても敏感で私が注意を向けますと、素早く反応を示します。この男性は身長一七五cm、やせ型で、全体にほっそりとしていて繊細な感じがして、やや女性的で色が白く髪は短く刈ってあります。私は確かめるために、新宿の町をあちこちと歩いてみたり、立ち止まったりしてみましたが、この方はずっとついてくるのです。その時はそのまま別れましたが、後日再会できるような感じがしますので、その時は、ゆっくりと会話を交したいと望んでおります。

以上、簡単に今までの経過をしたためましたが、先生はいかが思われますか。先生の御覧になった夢の内容が、私の今生における存在の意味をすべて物語っているように思われますが、すると、私はこれから何かをなさなければならなくなるのでしょうか。私などがあれこれと考えてみても致し方のない事ですが、正直申しまして、多少気がかりなことは事実でございます。先生の御意見をお聞かせいただければ、これに過ぎた幸せはございません。

長老に会う？

札幌市　千場敬史

私は以前より宇宙問題に関心を示して来ました。そして今年の四月以来当地に来て働いておられる女性の

方々に、また想像だにしていませんでしたが、あの偉大な長老に街の中で会うことが出来ました。

以下の出来事は今年四月二十一日午前八時十分ごろのことです。私はその時多くの乗客とともに地下鉄に乗っていたのですが、何かを感じて周囲を見回すと何故か通勤客らの顔に不満という念が満ちています（敵意に近い様な不満でした）。心の中で「あれ、皆どうしたのだろう。不満で一杯だ。今までこんな事を感じた事は一度もなかったのに」といぶかしがりつつ、地上の事故や災害の原因について思いめぐらしました。その時右側に立っている男の人が不思議そうな顔をして私を覗きこみます。「何だ、変なヤツだ。オレより幼いヤツだな」とその人を馬鹿にした瞬間、胸の中から『オット』という明るい掛け声の様な響きが伝わって来ました。驚いて左の方を見ると、茶と灰色の地味な格子模様のついたコートを着ている非常に背の高い男の人が立っています。

私は顔を上げてその人の目を見た時、気絶せんばかりに驚きました。「希望の光」と思わず叫びました。人間の目、そして顔の周囲から「希望」というものが光として現われていたのです！　生まれて初めて見た途方もないものに私は膝がガクガクしたまま、ただ「ああ、すごい、本当だった」と思いつつも、この方の側で人に侮蔑の念を向けたことを悔みました。

落ち着きを取り戻してその容貌を見なおすと、髪は茶色で短く刈り、右側に分け、膚は良く日に焼けて年齢四十歳ほどに見えるのかも知れません。ここで「かも知れない」と言ったのは、あまりにも内部の生命の光による新鮮さが強すぎたために我々が使う年齢という言葉が不適当なのです。私は新たに周囲を見回して「こんなすごい人がいるのに、皆、気がつかないのだろうか」と思った所、長老は身を小さくするかのごとく吊皮を強く握り締めて誰にも気づかれたくないようでした。また長老の目の前で座席についている人々は皆、石になったように全く知らない様子です。五分ほどして長老は一言も話さずに降りて行かれましたが、私にはそれで十分でした。

これは今でも私が信じていることなのですが、長老は遙か昔から私たち地球人の成長を待ってこられたようです。長老はさらに進化した天体に生まれる権利を敢えて辞して我々の成長のため何千年、何万年も待って来られたようなのです。

この出来事があって以来、様々な体験をしましたが、ラミューさんが同乗記の中で言われた「側にいるだけで愛と理解力が深まる」とは本当のことでした。私自身、オーラが見えたり、今まで知る事が出来なかった宇宙の一部でも垣間見る事ができました。しかし現実にこの世界で活動を続けようとすると様々な念が入りこんで来て、余程気を配らないかぎり、せっかく得た重要なものを見失うことがしばしばあります。これはこの想念世界の現状かも知れません。先にも書きましたが長老の現われに対して、周囲は暗い不満の念に満ちていたのは奇妙な感じがいたします。

遅ればせながら自己紹介をしますと、私は現在大学三年、化学専攻の学生で、この夏はアダムスキー型宇宙船のスターターを何とか考案しようと励んできました。

友人が欲しい

船橋市　小野みどり

会員の皆さん、お元気ですか。私は三月に入会した、まだ新顔の会員です。月例会にも全く出席できず第二土曜日がくるたびにソワソワイライラ。それでも母の監視の目があり、どうしても行けないのです。

現在、美術大付属高の二年生で、絵画にデザインに勉強にと忙しい日々を送っています。でも、悲しいことに、学校生活が少しも楽しくありません。心からわかりあえる友達がいないのです。神戸に親友とも言える人がいましたが、最近は手紙もくれず、どうしたのかと心配しています。私は、学校では一人です。どちらかといえば明るい性格だと自分でも思うのですが、なぜか気の合う友達ができません。中学時代まではこんなことを経験したことがないのただ驚いてぼうぜんとしています。そんな私を救ってくれるのは、大好きな絵画と、スペース・ブラザーズの存在でしょうか。もはや私にとって、彼らの存在を疑う余地などないのです。彼らがいなかったら、私は家族を別として、独りぼっちになってしまう。もちろんGAP会員の方と知りあえればこんなにうれしいことはありません。五月か六月の月例会には必ず出席します。悪いことではありますが、母には塾の補習だと告げて……。淋しいだけの高校生時代を過ごしたくないのです。

どうか皆さん、まだ何も知らない私ですが、よろしくお願いします。

×　×　×

●鹿児島県在住のGAP会員の方、ご連絡下さい。

〒899―21鹿児島県日置郡市来町大里一三九三　榎木律子

×　×　×

●拙著「神と文明」を無料で頒布します。希望者はハガキでお申込下さい。

〒820―06福岡県嘉穂郡桂川町豆田三三六の三　内田格男

講義録音テープを頒布

GAP東京月例会における久保田先生のア氏哲学関係講義一時間分の録音テープを頒布します。希望者は頒価一〇〇〇円、送料一四〇円を添えて左記へお申込み下さい。

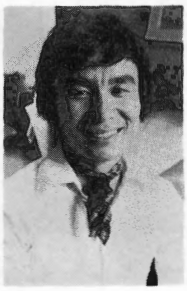
〒二七四　千葉県船橋市前原西8―5―18浜村達郎

宮内温夫氏の快挙

またもタイム誌の表紙を描く

日本GAPの有力メンバーで、アダムスキー哲学の熱心な実践家である在ニューヨークの商業美術家・宮内温夫氏は全米で頭角をあらわしているが、今年八月、世界屈指の大週刊誌タイムの表紙イラストを制作した。掲載されたのは八月十四日号で、数年前の掲載に続いて今度が二度目。日本人画家としてタイム紙の表紙にイラストが掲載されるのは同氏だけで、万丈の気を吐いている。

渡米後の苦節八年を経て、全米の美術学生の憧れの的になるほどの輝かしい栄冠の陰には、ア哲学を基盤にした絶対的な信念が原動力となった。米国籍を取得。三十五歳でまだ独身。



日本GAP企画第１回

アメリカ中米宇宙考古学の旅

■1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠デザートセンターに着陸した円盤から降り立った金星人とアダムスキーがコンタクトした場所に立つあなたの眼に映ずるものは何か？■多数のスペース・ブラザーズがひそかに住むといわれるグァテマラの密林地帯に眠る古代マヤの遺跡は何を物語るか？■日本ＧＡＰが企画するすばらしいツアーに参加するあなたの人生体験に画期的な影響を与えるものは？■めったにないこの絶好の機会に行を共にして人間の眼を開こう！■私たちにとって重要な意義をもつカリフォルニアとグァテマラで、すばらしい日々をすごそう！■帰途はムー大陸の名残りをとどめる美しいハワイでゆっくり休養を！

GAP会員は、こぞって行こう！

アダムスキーゆかりの地へ
古代マヤ神秘の遺跡の国へ！

日本ＧＡＰ創立18周年を記念し、昭和54年８月には大挙してアメリカＧＡＰ本部訪問とメキシコ・グァテマラの古代遺跡見学の旅を企画しました。多数の参加者が予想されますので早目にお申し込み下さい（昭和53年10月現在で、すでに10名以上の申込者がありました。）

- ●定　員　40名
- ●期　間　昭和54年８月10日→20日（11日間）
- ●費　用　￥458,000（航空運賃・朝食付ホテル・団体バス運賃・その他の費用を含む）　**●24回払い可**
- ●案内書申込先　〒133 東京都江戸川区本一色町365－818、日本GAP（140円切手同封のこと）
- ●主要見学地　米ロサンゼルス市（1泊）、パロマーガーデンズ（アダムスキー関係旧跡）、パロマー天文台、ビスタ町の米GAP本部（ビスタ付近のオーシャンサイド町に1泊・本部と合同夕食会を開催の予定）、カリフォルニア砂漠のデザートセンター（アダムスキーと金星人との会見地）、ふたたびロサンゼルス市（1泊）、メキシコ市、テオティワカンの遺跡（太陽のピラミッドと月のピラミッドその他・市内1泊）、グァテマラ市（考古学民族学博物館その他・市内1泊）、ティカル（古代マヤ最大の遺跡・グァテマラ市内1泊）、チチカステナンゴ（古代マヤ族が現代もそのままに住む町・グァテマラ市内1泊）、ふたたび米ロサンゼルス市へ（自由行動・市内1泊）、ハワイのホノルル市（自由行動・ホノルル1泊）
- ●旅行団長　日本GAP主宰　久保田八郎
- ●添乗員　ワールドセブン社　田中　正
- ●企　画　日本GAP
- ●共　催　トラベル日本・ワールドセブン社
- ●後　援　グァテマラ大使館

※この旅行は日本GAP会員を主体にしたものですが、会員でない方も参加できます　知人等にお誘い合わせの上、多数ご参加ください　この企画は日本GAP独自のもので他社とは一切関係ありません　不明の点は日本GAP宛お問い合わせください

日本ＧＡＰ

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818（Tel.03－651－0958）

予告　昭和53年度

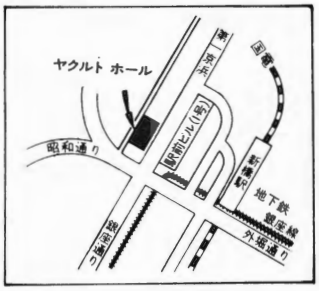
日本GAP総会

スティーブ・ホワイティング氏来日・大講演会

昨年の総会におけるステックリング夫妻の講演に引き続き、本年度の日本GAP総会にも、米国GAP本部よりスティーブ・ホワイティング氏を招待し、講演と実写映画公開による盛大な大会を実施することになりました。御協力に関係者一同厚く御礼を申し上げます。この貴重な機会をお見逃しなく万障お繰り合わせの上、ご出席下さい。

- ●主催　日本GAP
- ●日時　昭和53和11月19日（日曜日）　午前10：00より午後4：30まで
- ●会場　「ヤクルトホール」・港区東新橋1-1-19・ヤクルト本社ビル1F・Tel. 574－7255／国電・地下鉄「新橋」駅下車徒歩3分。（銀座大通りを4丁目方面から歩いた場合は昭和通りとの交差点を直進してすぐ左側）
- ●当日会費　¥2,000

●スティーブ・ホワイティング氏



〈ご注意〉

- ●当日会費は会場入口でご納入ください。
- ●ホール内での喫煙、飲酒、食事はご遠慮ください（弁当持込みは不可）。
- ●昼食は休憩時に各自でホールの外の場所ですませてください。再入場する場合は必ず胸にリボンをつけること。
- ●入場時に質問用紙を渡しますから、これに質問を記入して係員に返すこと。質問が多数ある場合は主催者側で選択して、「質疑応答」に提出します。
- ●テープレコーダー、カメラ持ち込み可。但し、ストロボ、フラッシュの使用は厳禁。録音内容や、映画の複写内容を他の刊行物に無断で掲載しないこと。
- ●控室へ不意に侵入したりホール外の場所でホワイティング氏をつかまえて質問をあびせることはご遠慮ください。

プログラム

10：00→10：30	挨拶	久保田八郎
10：30→1：00	講演「アダムスキー哲学の偉大さについて」	スティーブ・ホワイティング
昼食休憩		
2：00→3：30	米GAP関係実写映画公開	
休憩		
4：00→4：30	質疑応答	スティーブ・ホワイティング
4：30→4：35	挨拶	久保田八郎

司会　片　京／通訳　久保田八郎　アン・デイカス

日本GAP各地月例研究会案内

支部名	日　時	会　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2：00→6：00 **※ただし本年12月のみは16日（第3土曜日）**	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。電話（828)2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り，奥のエレベーターから4階へ行く。	¥ 300	テキストとして「テレパシー（文久書林刊)」を持参。2：00→3：00「テレパシー」講義，3：00→4：30主宰者挨拶・報告，テレパシー練習，休憩。4：30→6：00自己紹介，研究発表，質疑応答。 **※54年度テキストは「生命の科学」**
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 **※ただし本年11月のみは26日（第4日曜日）に変更**	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝片　京0720—31—5646	200	テキストとして「宇宙哲学」（たま出版刊)」「テレパシー」を持参。東京例会における久保田主宰者の講演テープを公開。
高知支部	毎月第1日曜日 午前10：00→	高知市桟橋通り2—1—55 「青年センター」電話（31）4931 連絡先＝橋詰利光0888—42—3884	100	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」 電話 0252—44—6766	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の「テレパシー」講義録音テープを公開。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後2：00→5：00	熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。電話(55)5235。国鉄「熊本駅」前から市電「健軍」行き乗車，「お城前」下車，同交差点左折，徒歩2分。 連絡先＝津野田俊行 0963—52—3381	100	テキストとして「テレパシー」（文久書林刊)」を持参。2：00→3：00 久保田主宰の東京例会における「テレパシー」講義録音テープ公開。3：00→5：00自己紹介，座談，質疑応答。
福知山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00 **※ただし本年11月は第2日曜日，12月は第3日曜日に変更**	福知山市「福知山市民会館」2階会議室。駅前から右方向の道路を直進し，2つ目の信号機の所。	50	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」，久保田主宰者の講演録音テープ公開，テレパシー練習，自己紹介，研究発表、質疑応答。
岐阜支部	毎月第3日曜日 午前9：00→12：00 **※ただし本年11月のみは第4日曜日に変更**	岐阜市神田町「商工会議所」電話（64）2131。国鉄または名鉄「岐阜駅」下車，徒歩10分，バスか市電で「柳ケ瀬」下車，近鉄百貨店を北へすぐ近く。 連絡先＝松尾和也 0582—51—8567	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田主宰者の講演録音テープ公開。支部長松尾氏による「生命の科学」解説。質疑応答，座談。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可 0222—29—4305 田中義則 0222—46—1350	200	東京本部月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：30→5：00	上山市「労働福祉会館」2階会議室。電話02367(2)6082。月岡公園入口より左側へすぐ。 連絡先＝漆山晃治 02367—4—3414 山口　緑 02367—9—2555	200	テキストとして「テレパシー（文久書林刊)」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第3日曜日に月例会を開催。場所と時間は〒060札幌市中央区大通東5丁目13　伊藤重信氏へ連絡のこと。			
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30	11月まで県の婦人会館。12月からは新築の静岡市民文化会館（向かい側)。 連絡先＝野口敏治　0542—86—7729	200	テキストとして「テレパシー」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

¥750　〒160

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述

テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

¥550　〒160　　¥650　〒160

絶賛！ アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

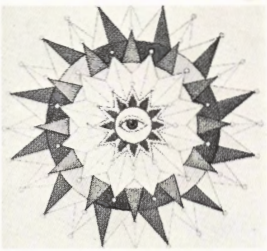
★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！　¥750 〒160

文久書林　東京都文京区白山1－29－12
振替・東京2521 Tel.(813)2495

①



②

①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500 〒100 ②¥200 〒50 一括注文の場合 〒100

編集後記

★超多忙の日々をすごしながらも、ここにやっと第65号ができました。すべては会員の皆様のおかげと心から感謝します。本号から今年度のヨーロッパ・エジプト紀行を二回にわたって連載しますが、これは単なる物見遊山の旅行ではなく、編者には宇宙的な重要な意義を帯びたものでした。ご賢察のほどを。

★今年も十一月十九日に米GAP本部よりスティーブ・ホワイティング氏を招待してヤクルトホールで盛大な総会を開催します。万障お繰り合わせの上ご参加下さい。招待募金もある程度のご協力を頂きましたが、なるべくご喜捨のほどをお願いいたします。振替用紙に「ホワイティング氏招待協力」とご明記下さい。

★東京月例会は十月でもって皇居・北の丸公園の科学技術館をおさらばし、十二月よりふたたびなつかしい上野公園内の東京文化会館へ会場を移しますから、お間違いなきようにお願いいたします。**十一月は総会開催のために東京月例会を中止します。**

★十月八日には山形支部総会に出席して、すばらしい雰囲気の中で盛大な会合をもつことができました。関係者各位に厚く御礼を申し上げます。この席でヨーロッパ・エジプト旅行時に撮影したスライド二百二十枚を初公開して大好評を博しました。ギリシア民謡その他の音楽をバックにして美しい光景が展開します。地方支部で映写希望の向きは早目にお申し込み下さい。ただしスライド映写は二次的なもので本命はアダムスキー哲学の促進講演にあります。念のために。

★38頁の広告のとおり来年八月には日本GAP独自の企画で「アメリカ中米宇宙考古学の旅」を実施します。ふるってご参加下さい。編者が同行する旅行には危険その他のトラブルは一切発生しませんから安心してお出かけ下さい。編者は危険をのがれる特殊なカルマを持つ人間なのです。

★あまりに多忙なために郵便物の処理が遅れて申し訳ありません。一個人の力でGAP活動を維持するのはほぼ限界に達しています。ご質問状は歓迎しますが、返事が大幅に遅れることをお許し下さい。

★本号では遠藤昭則氏の「ヨハネ黙示録解読試案」は休載しました。その他クリシュナムルティーの講演録も載せきれず、「会員の声」欄も多数のご投稿を割愛するのやむなきに至りました。あしからずご了承下さい。

★対人関係で最も美しいのはなんといっても「愛」と「親切」です。これを基盤にした上で横の連絡と提携をがっちりと固めて、高次な洗練された求道者の集団を形成しようではありませんか。ベルナデットが聖女と讃えられる所以は、奇跡より何よりも、極貧下で肉体の苦痛にさいなまれながらも神のごとき純粋な心を失わなかった点にあると思います。無意味な宗教論よりも一人間の生き方を模範とする方がはるかに有益です。私たちも第二の聖フランシス、聖女ベルナデットを志向したいものです。

謹告

本誌はこの十年近く一部頒価三〇〇円の線を維持しましたが、さすがにその間の物価上昇・印刷費の高騰などで赤字続きとなり、運営が困難となりました。

つきましては次号（第66号）より一部頒価を五〇〇円としますので、よろしくご協力のほどをお願いいたします。ただしこれは次号からの継続会費払込分より適用することにし、すでに会費納入分は据置きとします。

したがって次号からの継続会費は一回分（機関誌一冊分）を五〇〇円＋送料二〇〇円で計七〇〇円となります。なるべく三回分以上を振替でお払込み下さい。

日本GAP

GAPニューズレター　65号

編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365－818
電話(651)0958
振替東京4－35912(久保田八郎名儀)

Oct. 25 1978　頒価300円・送料200円